
Secret School Life—とある少年少女の物語—

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Secret School Life―とある少年少女の物語―

【Nコード】

N5273W

【作者名】

紫苑

【あらすじ】

私、上宮？、15歳。今年高校に入学。入学式は大変だったけど、中学生からの個性的な友人もいるし、幼馴染で親友の青柳澪にも再会した。クラスメイトもいい人だし、凄く楽しい学校生活を送っています。……だけど、1つ大きな問題がある。

……私は、男の子として、学校に通っているの。…うっん、男装じゃないよ。

中学の冬から、私は男になってしまった………

P r o l o g u e 入学式の朝（前書き）

連載中の小説を書いている時に、夢にアドバイスをもらって書いた話なので、かなり突拍子も無いものとなっています。残酷描写は、まあ一応、程度です。あるかどうかは……微妙ですね。

……とんでもない話だとは、自分でも思いますが。それでも興味を持って下さる方は、アドバイスをお待ちしています。

Prologue 入学式の朝

今日は、清条高校の入学式。真新しいブレザを来て、私こと上宮^{うえみや}あきこは、自宅で朝食をとっていた。

「おはよー、姉ちゃん。」

3つ下の弟、裕真が寝ぼけ眼をこすりながら部屋のある2階から降りてきた。

「おはよう、裕真。」

裕真の入学式は、3日後。実に羨ましい。

「姉ちゃん、今日から学校かあ。似合うじゃん、ブレザ。」

「……」

似合うと言われても、嬉しくない。

そんな心情を私の表情から読み取ったのか、裕真は吹き出しそうな顔をした。

「もういい加減、慣れたら？俺だって慣れたのに。」

「そういう問題じゃないってば。」

「だってさ、本当によく似合うよ。きつとモテるよ、女子に。」

そう言っ、裕真は大笑いしだした。

殴りたい衝動を辛うじて抑えて、私は溜息をついた。

自分の姿を見下ろす。白いカッターシャツの上から黒っぽいネクタイを締め、濃い緑色のブレザを羽織り、同じ色のズボン^{ズボン}を穿いて

いる。

：そう。私は、清条高校の男子の制服を着ている。

断じて男装している訳ではない。名誉に掛けて否定しておく。
では何故こんな格好をしているのかというと、私が男だから。いや、体が男、と言うべきか。

信じられない事に、私は中3の冬休みから、男になってしまった。比喻でもなんでもない。ある日ふと我に返ると、私は部屋の真ん中に突っ立っていて、鏡を見てみたら、見覚えのある顔をした男が私を見つめ返していたのだ。

その顔は、確かに私だった。それは確かなのだ。顔の造作は変わっていない。けれど、それはどこからどう見ても男で、体も男に変わっていた。

自分の目を疑い、意味も分からず呆然としていた時に裕真が入ってきた後の騒ぎは、実に嫌な思い出。忘れないけれど、きっと一生忘れないだろうな、とも思う。

「あのときはびっくりしたなあ。姉ちゃんに勉強聞こうと部屋に入ったら、知らない男が突っ立ってんの。思わず叫んじゃったもんね。」

裕真も同じ事を思い出していたらしく、笑い涙を拭きながらそう言った。笑い事じゃない。

「裕真のせいで、余計ややこしい事になった。『父さん、母さん！姉ちゃんの部屋に、変な男がいる！』なんて言ったらどうなるか位、少し考えれば分かるでしょ。」

おかげで父さんも母さんも、血相を変えて部屋に飛び込んで来て、「どこから入ってきた」とか「お前は娘の何なんだ」とかものすごい勢いで問いつめられた挙句、もう少しで放り出されそうになった。こっちも何かなんだか分からないのに、完全にエキサイトしてしまつた家族達に説明するのは、ものすごく大変だつた。これで顔が変わつていたり、自分の服（ズボンでよかった。スカートだったら、変質者扱いされていたに違い無い）を着ていなかったら、信じてもらえないまま、病院送りだつたことは間違いない。

「うん、俺も後でマズつたなつて思つたけど。でも仕方が無いだろう？ どう考えても変な男だよ。その時も美形だなつて思つたけど。」
「うるさい。」

確かに私は、元々ボーイッシュな顔立ちだつたし、それなりに整つているのも、多分間違つていない、と思う。女友達にも、「かっこいい」と言われることが多かった。

だけど、それはあくまで「女子として」だつた。ズボンを穿くと男の子に間違えられる、という事だつて無かつた。ところが、男になつた（ああ、もう少しましな言いようは無いものか）時に、顔の造作こそ変わらないものの、ご丁寧な男らしさが増した結果、随分と「ハンサムな男の子」になつてしまった。：自分で言うのもどうかと思うけれど、家族が口を揃えて言うのだから仕方が無い。

「良いじゃん、ブサイクになつた訳じゃないんだから。」
「だから、そういう問題じゃないの。ホント、何でこんなことになつちやつたんだろう。」

「さあね。それより俺は、家族以外が何の疑いも無く姉ちゃんを受

け容れていることの方が不思議なんだけど。」

「いや、男になった事の方が、余程不思議じゃない。」

「だってさ、誰も気付かないっていうか、姉ちゃんが男なのは当たり前前って顔するんだよ？おかしいだろ、どう考えても。」

誤解を解いた後、家族会議の結果、休みが明けても学校に行くべきではないと全員一致で決めた。理由は…まあ、言うまでも無いだろう。どう考えてもマズい。

まあ幸い、後3ヶ月もしないうちに卒業。休んでも出席日数に差し支えは無い。受験の申し込みもまだしていないから、そこで帳尻を合わせれば良い。誰も行かないような遠くにある学校を探して、そこに行こうという事になった。

ところが、である。サイズが分からないと言われ、自分1人で服を買いに行った所（どんな服を選べば良いか分からないから、裕真を連れて行こうかと考えたけど、裕真の友達に出会ったりしたら目も当てられないから諦めた）、ばったりクラスメイトであり親友の富永麻菜に出くわした。

素知らぬ顔ですれ違おうと思ったその時、麻菜が声を掛けてきた。

『あ、上宮君！ひっさしぶりだね、元気だった？』

その時の私の気持ちをぜひ察して欲しい。

『え、あ、うん。』

『何、私のこと忘れた訳？』

『いや、まさか。麻…富永、だろ。』

むしろ、この状況で「異性の名前を呼び捨てはマズい」と咄嗟に判断して言い直したのだから、誉めて欲しい。

『…今、松井美樹と間違えかけたでしょ。』

『違っつて。えっと、ごめんけど、わ…俺、用事あるから。』

『んん？デートかな？』

『誰とだよ。ちょっと買うもの多くてさ。じゃあまた。』

『うん、学校でね!』

別れた後、顔を覆って現実逃避したいのを堪えて、とにかく服を買い、大急ぎで家に帰った。

再びの家族会議で、どうやら私は、彼らの中で元から男子だったということになってしまったらしいという結論に達した。で、急遽制服を手に入れ、再び学校に行くことになった(余談だけど、その制服はそのまま弟のお下がりとなった)。

更にどういう訳か、戸籍にも男と記載されていたため、元々予定していた清条高校に、何の障害も無しに受験し、合格した。

それから一度も、私を見て驚いた人はいない。ご近所さんはおるか、じいちゃんばあちゃんまでにこにこと「?君」と呼んだときは、ボケが始まったのか、と返しそうになった。

「まあ、そうね。麻菜に「上宮君」と言われた時には、ショックだったな。」

「…姉ちゃん、前から言おう言おうと思ってたんだけど。いい加減、その言葉遣いやめてくれ。その姿とその声で女言葉は、怖い。」

真顔で言われ、少しショックを受けた。

確かに、どこからどう見ても男だし、声も変わった(高さはそのままだけど、なんか男っぽくなった)から、女言葉は怖いのかも知れない。けれど、つい4ヶ月前まで使っていた言葉を変えろと言われても困る。そりゃあ、結構男の子っぽい言葉遣いをする事もあったけれど、基本的にちゃんと女言葉を使っていたのだ。

「だって…。それを言うなら、裕真だって未だに「姉ちゃん」じゃない。」

「あ、それもそうだ。じゃあ兄ちゃんって呼ぶな。」

「お願いだから、やめて。」

本気で頼み込んだ。兄扱いは勘弁して欲しい。

「だってさ、ね…。兄ちゃん。家の中でそうやってると、外でぼろ出すよ。周りどん引きだよ？イケメン高校生が「でしょ」とか言ったら。本気で気持ち悪いって。」

「イケメンは外して。大丈夫、外では気をつけてるから。家でくらくらして無いと、何か本当に男になりそう。」

「だから、男だって。じゃあ兄ちゃん、お客さん来た時に、俺にうつかり女言葉使わない自信、ある？絶対、反射的に言っちゃうと思うよ。」

う、と言葉に詰まる私に、弟は畳み掛けた。

「それに、俺の精神衛生上悪い。兄ちゃんは自分が見えないから良いかもしれないけど、端から見るとマジで怖いから。」

兄ちゃん兄ちゃんと連呼され、更にここまで言われて、どれだけ傷つくか分かっているのだろうか、このガキは。

けれど、弟の言う事に理はある。それは分かっているのだけど、しかし。

「…分かった。努力する。」

「そうしてくれ。」

やっぱり気が滅入る事には変わりがない。

「兄ちゃん、時間大丈夫なの？」

言われて時計を見ると、8時。8時30分集合であり、学校までは徒歩15分とは言え、そろそろ家を出た方が良い。

「そろそろ行くよ。」

そう答えて、立ち上がり、床においていた鞆を手取る。制服のズボンが目に入り、溜息をつきそうになるのを堪え、裕真に向き直った。

「行ってくる。帰りは昼頃になると思う。」

「了解。いつてらっしゃい、兄ちゃん。」

最後の一言に暗澹となりながら、私は家を出て行った。

Greeting 友人関係

住宅街を出て、商店街を通り、広々とした大通りの先に清条高校はある。バスの駅も地下鉄の駅もこの通りの入り口にあるから、ほぼ全ての生徒がこの道を通って登校する。勿論私も例外じゃない。

真新しい制服を着た男女が、緊張した足取りで大通りを通っていく。緊張のせいかゆつくり歩く新しい同級生達に合わせながら歩を進めていた私は、聞き慣れた声に名前を呼ばれ、振り返った。

「上宮君！おはよう！！」

「おはよう、富永。」

冬休みに私を打ちのめしてくれた麻菜だった。とはいえ、彼女のおかげで学校に行っても大丈夫だと分かったから、その点は感謝している。

「やっぱり似合うねえ、ブレザ。なかなか似合う子少ないと思うよ、このデザイン。」

にこにこ私を見つめる麻菜。だから、似合うと言われても嬉しくないってば。

清条高校の女子の制服は、ブレザの色が男子より少し明るく、黒っぽいネクタイの代わりに落ち着いた色の赤いリボンを締める。高校生らしい落ち着いた雰囲気と可愛らしさを両方演出するデザインで、女子中高生の憧れの的だ。

私も着るはずだったブレザ。下手すると顔負けするこのブレザを、けれど麻菜は見事に着こなしている。

やや茶味がかかったセミショート黒髪、綺麗な曲線を描く輪郭。なかなか人目を引く外見だ。

「そうかな、ありがとう。富永も似合ってるよ。」

そう言ってにっこりしてみせた。すると、麻菜は何故か顔を赤くしつつ、笑い返してきた。

「ありがと。上宮君に言われると、何だか嬉しい。」

それはそれは。12月まで彼女は、ことあるごとに組み付いたり、飛びかかったりしていたのだけど、随分と可愛らしい。

…まあ、男の子にそんな事をする訳も無く。私が女だという事実と共に忘れてしまったのだろう。

「あ、上宮君だー。」

「あ、ホント。久しぶり〜。」

そんな私達2人に、松井美樹、佐々木香奈が加わった。

美樹は肩にかかる程度のくるくるの茶髪で、童顔。その明るい性格そのままの外見だ。香奈は細面の和風美人。真面目な優等生という雰囲気滲み出ている。それでも嫌みな印象が全くないのが、香奈の凄い所。

麻菜と美樹と香奈と私。中学では、仲良くつるんでいた4人組だった。

とはいえ。

「おはよう、松井、佐々木。久しぶり…かは微妙じゃないか？」

「おはよー。」

「そうかなあ？まあそつか。何か、中学で毎日会ってたから久しぶりに感じるけど、合格発表から2週間位しか経ってないんだよね、そう言えば。」

彼女らは今、あくまで私の事を「割と親しく話す男子」としか認識していない。12月までのように、じゃれ合ったり、行動を一緒にする事は無くなった。「あたし達は仲良し3人組」…その言葉が、少し寂しい。

「おーおー。相変わらずだな、上宮。」

野太い声が聞こえたかと思うと、首に腕が巻き付いた。振りほどきながら声の方を見ると、がたいの大きい、癖の強い黒髪の男がにやにや笑いを浮かべていた。

「おはよう、江藤。そっちも変わりないみたいだな。」

江藤一馬。ラグビー部に所属していた彼は、有り余るエネルギーを部活だけではなく、生徒会にも回していた。体育委員長があれほど働くのも珍しいだろう。

「おう、元気元気。けど、俺の言いたかったのは、相変わらずハーレムだなんてことさ。」

麻菜達に聞こえないような声で私に囁く江藤。頼むからそんなに近づかないで欲しい。

「ハーレムって、何だそれ。登校中にたまたま会っただけだよ。」
ついでに言うとな今の状況、実際には江藤がハーレムだから。

「へー。まあ、そういう事にしておこうか。」

そう言って、江藤はようやく体を離してくれた。ひそかにほっとする。

Greeting 友人関係（後書き）

少し短くなりました。その分今回は2話同時更新しておきます。話進んでませんからね…。

ただ、ストックがあるうちはともかく、このペースでやっていると更新する頻度が…

もう一話書いていますし、厳しいと思います。ので、これからもそれほど長くはならないと思います。

最初のは、説明を区切る訳にもいきませんでしたから。遅筆かつへたれですみません…

D i a l o g u e 初めて知る事実（前書き）

前回の後書きにも書きましたが、2話同時更新です。

Dialogue 初めて知る事実

「でも、意外。ここで上宮君に会うとは思わなかったなー。」
私達の会話は聞こえなかったらしく、美樹がそんな事を言い出した。

「…それは、俺がここに受かるとは思っていなかった、って事か？」

麻菜、美樹、香奈、江藤、そして私。進学校として名高い清条高校に受かったのはこの5人だけだ。入試は相当難しい。だからこそ、そう言う意味かと思ったのだけど、

「そんな訳無いでしょ。」

「上宮君が落ちたら、あたしは絶対受かってないよー。」

「…それ嫌味？」

「上宮、お前何ボケてんだ？」

4人に一齐に白い目を向けられてしまった。いやだって、本当に難しかったから。

「私が言いたかったのは、どうして上宮君がこの時間に登校してるのかなーってこと。てつきり、新入生総代として、入学式のリハーサルに出てると思ったのよ。」

アクセント付きの美樹の言葉に、首を傾げる。

「それは無理だろ。俺よりも頭のいい奴、ここにはいくらでも集まるだろうし。」

「………ねえ、上宮君。もしかして上宮君って、テストとか模試の成績って、点数だけ見て捨てちゃうタイプ？」

半信半疑と言った様子で香奈に聞かれて、戸惑った。

「え、だって、他に何を見るんだ？ 答案が返って来る時に復習はしてるし、模試は点数以外何も載ってないし。」

聞き返すと、返ってきたのは4人の深い溜息だった。

「そうだったんだ…」

「どーりで上宮君って、テストの時にがついてない訳ねー…」

「何か、ライバル意識持ってたのが、馬鹿みたい…」

「お前、それ、端から見るともの凄く嫌な奴だぞ…」

一体、何なのだろうか。

こつも4人に冷たい態度を取られると、私が悪いような気がするから、不思議だ。

「上宮君。全国統一模試、覚えてる？ 10月にあったやつ。」

美樹の言葉に、記憶を掘り起こす。

「えーと、中学生が受ける模試の中では最高難度を誇るって、あれ？ 確か、清条高校を受ける生徒は義務化されてるんだよね。」

まだ平和な日々を送っていた時に受けた、あれだ。冬休み前に返ってきて、家に帰って、……あれ？

何度思い出しても、結果を見た覚えが無かった。次に鮮明に思い出すのは、あの驚愕の瞬間。

見ようと思ったのは確かなんだけど、その先がぶつくり記憶が途切れている。

この辺りに、謎を解く鍵が隠されているのかもしれない。そう思ったけれど、次の瞬間には興味を失った。どうせ、何があつてこうなつたかが分かつた所で、何が変わる訳でもないし。戻るものなら戻りたいけれど、何となく、無理だろうと感じている。

「おい、上宮？」

目の前で手をひらひらされて、我に返る。どうやら、考え事に没頭しすぎて、立ち止まってしまっていたらしい。

「あつと、ごめん。何でも無い。で、その模試が何？」

慌てて謝り、歩くのを再開してから、話の続きを促す。美樹が溜息をついてから、重ねて問いかけてきた。

「その模試の結果、見た？」

「えーっと……」

「……見てないね？」

「…すみません。」

睨まれた。なんだかとても怖いので、素直に謝っておく。

「それ以外の模試で、順位とか見た事無いの？」

「順位なんて載ってたのか？」

それは知らなかった。

再び、4人が溜息の大合唱。溜息つくとき幸せが逃げるよ、と思つたけれど、言える雰囲気ではない。香奈がゆっくりと名詞を発音した。

「…1位。」
「へ？」

あまりにも短いその言葉に、それ以外の反応が出来なかった。

「だから、1位。校内でじゃないよ、全国1位。」

「…誰が？」

思わず聞き返すと、4人に睨まれた。

「……嘘だろう？」

信じられない。冬に麻菜に会った時に負けない驚きだ。

確かあのテスト、清条の入試と同じ位難しくて、かなり苦戦した覚えがある。絶対、もっとこう、すらすら解けた人がいてもおかしくない。

ここ数ヶ月の不思議現象と一括で扱うべきかと思ったけれど、性別と成績には何の関係もない。それに、時期も合わない。
と、いうことは。

「マジで？」

もう一度呟くと、バックが顔目掛けて飛んで来た。慌てて手で払い、江藤を軽く睨む。

「危ないだろ。」

「いっぺん怪我しやがってんだ。まあつまりだ、松井の言葉はそういう意味なんだよ、全国一位君。理解したかな？」

「…理解しました。」

据わった目と低い声で凄まれ、気圧されて頷いた。確かに、それ

なら新入生総代に選ばれると思われてもおかしくない。

「まあ、まぐれだったって事じゃないか？選ばれなかったって事は。」

「今までの模試で全て1位とおいてそついう事を言つのかな上宮君は。」

「すみません。」

怖いです。そんな目をして一息に抑揚無しで言わないで下さい香奈さん。本当に怖いですから。

「でも、ホントに選ばれなかった訳だし。」

そんな連絡は来ていない。家族の誰からもそついう話は無かった。

「上宮君、本番に弱いタイプなのかな？」

「余り意識したことはない、というか、入試で上がってはいなかったけど……」

首を傾げて呟く麻菜に、同じく首を傾げて答える。

「まあ、今初めて自分の立ち位置を知った奴の主張に、説得力はねえな。」

江藤の言葉に、視線を明後日の方向に泳がせる。

D i a l o g u e 初めて知る事実（後書き）

タイトルに毎度英語を付けている訳ですが、いつまで続く事か…
作者の英単語力に挑戦です（笑）

S o l u t i o n クラス分けと真相（前書き）

他に良いタイトルを思いつかない作者を許してください…

Solution クラス分けと真相

そうこうしている間に、校門にたどり着いた。校庭の真ん中辺りに掲示板があり、そこに人ばかりが出来ていた。

「合格発表と同じ所で、クラス割りの発表するんだねー。」

美樹が呟く。何となく感慨深げな顔をしているのは、5人と同じ。あの受験戦争を勝ち抜き、合格発表で自分の番号を見つけてから、まだ2週間なのだから、思う所があるのは当たり前。

「見てみようよ、皆がどこのクラスか。」

麻菜の提案に、全員が頷いた。

クラス割りの紙は、男女別に名前があいうえお順に書かれ、それぞれの名前の横にAからJまでのアルファベットが書かれていた。それが自分のクラスということらしい。

変わった書き方だな、と思ったけれど、まあ誰がどのクラスか一目瞭然なのよりは、良いのかもしれない。

名前を探す。こういうのって、何だかわくわくする。

「誰か一緒になるかなあ。」と美樹。

「全員一緒かもよ。」香奈がわくわくと言った。

「…流石に厳しいんじゃないか？」私がそう言うのと、

「うるさいな、上宮君。良いじゃない、夢見たって。」と香奈に言い返された。

…こう言う会話は、変わらない。こうして、香奈に余計な突っ込みを入れて、「夢を壊すな」と軽く睨まれて。
違うのは、私の言葉遣いだけだ。

少し感傷的になっている間に、残りの4人は全員のクラスを見つけて出したらしい。

「富永と佐々木がA組、上宮と松井がD組で…俺だけ1人、F組だよ。」

江藤がそう言って、ちょっと悲しそうな顔をしてみせた。勿論演技だろうけれど。

「残念だねー、江藤君。」

「大根役者は黙ってる。」

全く心のこもっていない美樹の言葉に、江藤がわざとらしく睨んだ。まるで漫才だな、と思った。…口には出さないでおこう。

その時、麻菜の表情が随分冴えない事に気が付いた。掲示板を見に行こうと言ったときの上気した顔が嘘のようだ。

どうしたのか聞きたい所だけど、異性に聞かれても答えづらいはず。そう思って、盛り上がる3人に声を掛けた。

「じゃあ、移動しようか。いつまでもここにいと、他の人の邪魔だし。」

「あ、そうだねー。上宮君は気が回るなあ。江藤君とは大違い。」

真っ先に食いついた美樹は、定型句のように江藤をからかう言葉を入れる。

それに言い返すのもはやお決まり…

「何だと、コー」

「上宮君？上宮君、いるんですか！？」

…だっただけで、切羽詰まったような声が江藤の言葉を遮った。声の主は、ポニーテールにした長い髪を振り、必死の形相をした少女。ブレザの左腕に腕章を付けている所を見ると、生徒会役員らしい。

どうして私をそんなに必死で探しているのか分からないけど、鬼気迫るその表情にたじたとになりながら、答えた。

「えっと、はい。僕が上宮ですけど。」

「上宮？君！？」

頭1つ背の低い少女に詰め寄られ、面食らいながらも頷く。

「体調でも悪かったの？上宮君、新入生総代の挨拶をするんだから、8時には来て下さいって連絡したはずよ？今まで何をしてたの？」

少女の言葉に、ぽかんとなった。

「……挨拶？」

「そつよ！まさか忘れてたの！？」

背後から冷気が漂ってきた。

「…上宮君、忘れてたんだ…」

「良い根性してるね…」

「普通忘れる？あり得ない。」

「上宮…お前……。」

「……いや、待ってくれ。」

4人からどろどろというBGMを付けたくなるような声音でそう

言われたけれど、断言しよう。私は無実だ。

大急ぎで記憶をひっくり返したけれど、そんな事を聞いた覚えは絶対に無い。入学書類は全て隈無く目を通したが、挨拶のあの字も書いてなかった。郵便だって、高校から何か手紙が来た事は無かった。

記憶喪失もあり得ない。いや、男になった時の前後の記憶をきれいさっぱり失っている私が言うと言得力が無いと思われるかもしれないけれど、これはその経験があるからこそ言い切れる。この2週間の生活を日記に書けと言われれば、全て余す事無く書けると、自信を持って言えるくらいだ。

「あの、連絡はどういう手段でしたか？」

「電話よ！1週間前の朝に！貴方、分かりましたって言ったじゃない！」

背後の冷気がますます強くなったけれど、既に私は全貌を掴んでいた。

「…あの、もしかして、「分かりました、伝えておきます」、ではありませんでしたか？」

「……え？あ、そう言えば……」

やはり。携帯を取り出し、裕真に電話を掛ける。ワンコールで繋がった。

「はい、上宮です。」

「裕真、？。」

「……………」

「裕真？」

「…あ、そっか。うん、何？ね…兄ちゃん。」

慣れたんじゃないかなかったのかと言いたいけど、人の目があるので我慢した。

「裕真。お前、1週間前、電話をとらなかったか？」

「電話？1週間前？」

「俺が、ばあちゃん達の所に行ってた時。」

「……あ。」

「……………」

「……ごめん、兄ちゃん」

それだけ行つて、電話はぶつりと切れた。うん、裕真。君にはこれから1週間、掃除当番を代わってもらおう。

少女に向き直る。呆然としている相手に、丁寧に頭を下げた。

「家庭内の連絡ミスがあつたようです、申し訳ありません。」

「……もしかして、弟さんだったんですか？」

黙つて頷く。少女が顔を赤らめた。

「ごめんなさい、上宮君には何の落ち度も無いのに、怒鳴っちゃつて……」

「いや、伝え忘れた弟の責任ですから。家族ですし、僕にも責任がありますよ。」

項垂れて落ち込む少女に、その声を掛けた。そう、これは裕真のせいだ。が、あいつの性格を知っていて、連絡の有無を聞かなかつた私も悪い。

「……そう。でも困つたわ、式までもう40分も無いのに……」
そう呟くと、少女はがばつと顔を上げた。怖い位真剣な目で私を見つめる。

……何故だろう。嫌な予感がする。

「行きましょう、上宮君！」

そう言って少女は、私の腕をがしつと掴み、歩き出した。

「え？」

引つ張られるままに歩きながら聞き返した私の耳に、信じられない言葉が届いた。

「だから、講堂！挨拶、よろしくね！！」

「な、ええっ！」

無茶にも程がある。リハーサルどころか、原稿も書いていない。

「代わりの子もないのよ。大丈夫、何とかなるから！というかせなさい！！」

そう言って少女は、それ以上耳を貸さず、呆然と突っ立つ私を半ば引き摺っていった。私は、混乱する頭を必死に動かして、挨拶とはどんな事を言うものだったかと考えながら、止めるどころか笑顔で見送る友人達を恨んだ。

Solution クラス分けと真相（後書き）

さて、?はどうなるのでしょうか。

S u r p r i s i n g 記憶と少年（前書き）

唐突ですが、視点が変わります。

Surprising 記憶と少年

1-Dと書かれたプレートが下げられている教室に入り、黒板に示された座席表に従って席に着いた。私、青柳^{あおやぎみお}湊の席は、ちょうど真ん中辺り。高校は男女別のあいいうえお順だからだ。

辺りを見回す。誰もが緊張した表情を浮かべていて、落着かなさそうにあちこちに視線を巡らせている。きっと、新しい仲間達への不安と期待でいっぱいなのだろう。

勿論私も例外ではない。特に私は県外からの入学だから、全く知り合いがいない。このクラスでちゃんと友達が出来るのか、少し心配。

もう1つ、気になる事がある。親友、上宮？の事だ。

私は小学2年生までこの町に住んでいた。？は幼稚園からの仲良しで、お互いの家でよく遊んだ。お父さんの転勤で引っ越した後も、ずっと文通していた。中3になってからは、部活も最後だし受験もあるからという事で、文通を止めていたけれど。

？の名前は、模試の上位者順位表で、いつも一番上に見つける事が出来た。特に、10月の全国統一模試は圧巻だった。5教科500点満点中、492点。2位以下を50点以上引き離していた。それほど成績を取っても、？はそれを匂わせない。勉強の話題に一切触れないで、日常の報告をあつさりを書く？の手紙からは、彼女が全く変わっていない事が窺えた。

最後に貰った手紙には、清条高校を受けるつもりだと書いてあった。家も近いし、入学しない理由はない。？の成績を知っている私

は、彼女が清条高校に合格する事を疑ってはいなかった。

けれど。何度も掲示板を見たのに、？の名前は無かった。

私がここに戻って来る事を、？は知らない。決まったのは去年の夏だったから、知らせる機会が無かった。だからこそ、？のクラスを確認して、びっくりさせようと思っていたのに…。

一体、何があったのだろう。他に行きたい所が出来たのだろうか。まさか、落ちた訳ではないと思う。

先程から、それが気になって気になって仕方が無い。

その時、チャイムが鳴った。不思議なメロディのチャイムだった。思わず首を傾げる。

壮年の男の先生が入ってきた。教卓の前に達、私達を見回して言った。

「ただいまから、入学式が始まります。A組から順番に講堂に入場していきますので、廊下で出席番号順に並んで待機して下さい。生徒会役員が誘導しますから、静かについて行って下さい。」

がたがたと椅子を鳴らす音が響く。誰もが緊張した顔をして、先生の言葉に従った。

私も立ち上がった。そして、？の事は一旦棚上げにして、入学式への期待に胸を高鳴らせた。

講堂は、ステージ型で、椅子が整然と並べてあった。床に赤とか緑で栓が引いてある所を見ると、普段は体育館としての役割も果たすみたいだ。

清条高校の入学式は、どういう訳か保護者の入場を禁じている。「この国のリーダとなるべき人材としての自覚を持たせるため」って、入学式の案内には書いてあった。自覚を持つ事と保護者が入学式を見に来る事にどういう関係があるのかはよく分からないけれど、15にもなって親が来るのは恥ずかしいから、口実が出来てほつとした、というのが本音。

先生、先輩方の拍手に迎えられて、D組の席に着く。椅子は思った以上に座り心地が良くて、密かに驚いた。

「組まで全員が椅子に座った所で、綺麗な声のアナウンスが入った。」

『ただいまより、入学式を開式致します。』

入学式は、中学と余り変わらない。開式の辞から始まって、校長先生の話、PTA会長の話。違うのは、この後にOB会会長の話があった事位だろう。

在校生からの歓迎の辞（ポニーテールの、「あいざわまどか」と言う綺麗な女子生徒による、とても素晴らしいものだった）が述べられて、その次は。

『続きまして、新入生代表の言葉。新入生総代、上宮？さん。』
「はい。」

アナウンスと、それに答えた低めの声に、ほっとした。やっぱり？は入っていたんだ。それも、新入生総代。？の成績を考えたら当然なのかもしれないけれど、名前が見つからない事で、全く考えに上らなかった。

それにしても、どうして見落としたんだろうと不思議に思いつつ、ステージに上がった生徒の姿を見て……啞然とした。

そこには、濃い緑色のブレザを着た、背の低い少年が立っていた。

「……………え？」

思わず声を漏らし、慌てて口を噤んだ。隣の子にちらつと視線を走らせる。真っ直ぐステージを見つめている所を見ると、聞こえなかったようだ。それほど大きな声ではなかったらしい。ほっとした。

（それにしても…）

もう一度、ステージに目をやった。やっぱり、見間違えではない。そこにいるのは、凄く整った顔立ちの少年。少し緊張してはいるものの、同じ新入生とは思えない見事な挨拶を、高校1年生の男子にしては高めの、よく通る声で述べている。

？も整った顔立ちをしている。毎年、年賀状（と言っても、今年

の分は無かったけれど）の写真を見ては、格好いいなあ、と思っていた。

けれど、？は女の子だ。

（同姓同名の赤の他人、という事なのかなあ…？）

確かに？という名前は、男の子に付けてもおかしくない。けれど、上宮という名字はそうそう無い。

それに。少年の何気ない仕草や、表情が。ずっと前に別れた少女を思い出させて仕方が無い。

（どういう事……？）

少年が挨拶を終えて、ステージを降り、元いた席に座った。その後の残りのプログラムが消化されていく間も、私の頭は疑問でいっぱいだった。

S u r p r i s i n g 記憶と少年（後書き）

？は何とか挨拶を終えました。

漣はこれからどうするのでしょうか。

R e l i e f 安堵の後の自己紹介（前書き）

？に戻ります。

Relief 安堵の後の自己紹介

入学式が無事終わり、新入生は講堂を退場した。

目の前でたくさんの生徒が自分の教室に向かうのを見ながら、私はようやく、安堵の息を長々と吐き出した。

少女に引き摺られ講堂に入り、他の生徒会役員や先生方にどうして遅れたのかを説明し謝罪するまでに、5分を費やした。その後15分で原稿を書く事を要求されて、どんなことを言うものなのかを聞きながら、大急ぎでそれらしいものを書き上げた。更にその後10分で覚えるよう強要（…もはやあれは脅迫だった）され、必死で頭に叩き込んだ。早口でされたステージへの上がり方などの説明を無理矢理飲み込み、一度やってみようという所で、生徒達が入ってきてしまった。文字通りのぶっつけ本番だった。

ステージに上がっていた3分間は、本当に緊張した。多分、入試の時よりも緊張したと思う。はつきり言って、原稿を忘れたり、つかえたりしなかったのが奇跡だった。…いや、実を言うと、一部忘れちゃって、その場ででっち上げたんだけど。

裕真には、何が何でもこの借りを返してもらわねばなるまい。1週間掃除当番をさせるだけでは生温い。ここまで大変な思いをしたのだ、1週間、掃除・洗濯・風呂当番をさせねば気が済まない。

ちなみに、料理当番を外したのは、裕真が天才的な料理音痴だからだ。1週間もあんな不味いものを食べるのは、耐えられない。以前に食べた黒こげなのに火の通っていない野菜炒め（苦い上に、

何故か辛かった）を思い出して、もう一度溜息をついた私に、私に無茶をさせた張本人が、笑顔で話しかけてきた。

「お疲れ様、上宮君！凄く良かったわ。」

「ありがとうございます。かなり緊張していたので、きちんとできたか、凄く不安なのですが。」

言いたい事はいくらでもあったけれど、相手は上級生。失礼な態度を取る訳にも行かないので、お礼を言って、軽く頭を下げた。

「そうは見えなかったな。本当に良かったわよ。ありがとう。」

自己紹介が遅れたわね。私の名前は相沢望。望、と書いてまどかと読むの。一応、この学校の生徒会長なんてやってます。」

相変わらず笑顔のまま、ポニーテールの少女がそんな自己紹介をした。名前にこだわりがあるようで、わざわざ宙に漢字を書いてみせてくれた。

在校生代表の挨拶をしていたからもしかして思っていたけれど、やはり生徒会長だった。

入学式前はそれどころじゃなくて気が付かなかったけど、相沢先輩はかなりの美少女だ。ポニーテールに束ねたつややかな黒髪、全体的に落ち着いた雰囲気を漂わせる、小さく端正な顔。随分と大人びた少女は、プロポーションもばっちりだ。胸の小さかった私としては、実に羨ましい。

「上宮？です。相沢先輩の挨拶も、素晴らしいものでした。僕のせいで今日はまともなりハーサルが出来なかったでしょうに、それを全く感じさせない挨拶でした。」

名前はもう知られているけれど、相手に合わせて名前を名乗ってから、お返しにと賞賛を送る。

「あら、ありがとう。お世辞が上手ね。」

「お世辞ではありませんよ。緊張していたのできちんとは覚えていませんが、本当に感動しました。」

相沢先輩の挨拶は、洗練を尽くした見事なものだった。物腰とい話す速度といい内容といい、文句無しの満点だった。

「数日前に原稿は書き終わってたし、昨日のうちに暗記も終わっていたから。たった40分足らずの準備であれだけの挨拶をやり遂げた上宮君の方が、余程凄いわよ。」

「それも、一度も練習をする事も無く、な。大したものだ。」
不意に背後から声を掛けられ、振り返った。背の高い男子生徒が私を見下ろしていた。

「議長をやっている、岩瀬泰斗だ。本当に良くやった。」

「上宮？です。ありがとうございます。」

お礼を言って頭を下げてから、岩瀬先輩を見上げる。

170台後半くらいなのだろうけれど、その鍛え上げられた体が、重厚な存在感が、彼を実際よりも大きく見せていた。本当に高校生なのだろうか。

ちなみに岩瀬先輩、凄くカッコいい。私もそれなりらしいけど、岩瀬先輩は男らしいというか、もう、とにかくカッコいい。こんな近くにいると、ドキドキしてしまうくらい。

要するに、私のまるきり好みのタイプだ。

けれどまさかそんなものを顔に出せるはずも無い。まあ、緊張し

ているのは当たり前と見なされるだろう。3年生2人に囲まれているのだ、緊張しない方がどうかしている。

「さて、上宮。そろそろ教室に戻った方が良い。担任によるホームルームが始まるはずだ。」

「あつ、そうね。ごめんなさい、引き止めちゃって。上宮君も、クラスに馴染まないとだしね。」

確かにそれは大切だ。男子と仲良くなる方法なぞ全く分からない私にとって、出来るだけ多く接触するのは絶対条件。江藤が一緒じゃないのが本当に残念なのは、実は私だったりする。

「いえ、気になさらないで下さい。それでは、相沢先輩、岩瀬先輩、失礼致します。今日は本当に、ご迷惑をおかけしました。」

「上宮君は悪くないんだから、気にしないで。終わりよければ全てよしって言うでしょう?。」

「まあ、それを強要したのはこちらだが。今日はお疲れ、上宮。」

そう言ってくれる先輩方2人にもう一度頭を下げ、私はその場を立ち去り、教室へと急いだ。

Relief 安堵の後の自己紹介（後書き）

余り進んでませんね…

まあ、この辺りは？の切実な思いがこもっているんで、優しい目で
見守ってあげて下さい。

C h i t c h a t 労いと雑談（前書き）

進みません。

ですが、情報は結構駄々漏れ（？）です。

Chit chat 労いと雑談

教室へ向かう途中、名前を呼ばれて振り返った。

「お疲れ、上宮。見事な挨拶だったぜ？」

江藤だった。からかうような笑顔に、しかめ面を返す。

「他人事だからって…。本当に大変だったんだぞ。」

「いやいや、立派だったぜ。とても即席とは思えん。」

「ホント、凄かったよ上宮君！」

横から麻菜にそう言われ、苦笑する他無かった。

「ホントにねー。ステージに上がる姿を見た時は、私もドキドキしちゃった。」

「あれで情けない姿を晒されたら、みおか弥丘中の恥だもんね。」

「…事情を知ってて恥とか言っつなよ……。」

美樹に続いて繰り出された香奈の暴言に、ぼやかずにはいられなかった。

「だって、普通の人は事情なんて知らないし。」

「まあ、そうだけどさ…。」

「それにしても、弟君、忘れるとはねー。」

美樹の言葉に、渋面で頷く。

「あの時は、ばあちゃん達の所に遊びに行っていたんだけど…油断

した。」

「ねえ、弟君って、どんな感じ？」

麻菜に興味津々で尋ねられ、少し首を傾げた。

「裕真？お調子者だよ。顔は余り似てないかな……。でも、声はそっくりだ。」

そう、私達姉弟（意地でも兄弟とは認めない）は声が似ている。以前からそうだったんだけど、たださえ低めだった私の声が男っぽくなった事、裕真がまだ声変わりしていない事によって、拍車がかかった。両親ですら区別がつかず、頭を抱えている。

……ただ、最近裕真の声が少し低くなりだした。このままだと、私の方が高いという事になりそう。本来はそれで普通だけど、第三者の目を考えると、今から憂鬱だ。

「へえ？まあ、上宮は声が高いからな。で、いくつなんだ？」
高くない、低めだ！

「……3つ下。」

「ああ、じゃあ弟君も入学かあ。」

「3日後だけだね。」

香奈の言葉に頷く。1ーDの教室が見えてきた。

「この高校、電子化に力入ってるって本当みたい。黒板もスクリーンだった。」

「あ、それ私も驚いた！お金掛かるのにね。」

「…松井、気にする所はそこか？」

私に教えてくれているらしい麻菜に、相槌を打つ美樹。それに突っ込んだのは、言わずもがな、江藤だ。

「だって、ここ公立よ？よく国が許したなーって思っで。」

「スーパーサイエンスハイスクールの力、かな。」

「…何それ？」

何気なく言っただけなのに、4人が食いついてきた。あれ？

「いや、科学技術や理科・数学教育を重点的に行う、文部科学省指定の高校。化学クラブに力入れたり、研究発表を行う代わりに、予算が下りる。清条高校もそうだから、そのお金で電子化を進めたのかなって思っただけ…、これ、学校案内のパンフレットに書いてあつたろ？」

だから、4人は知っているはずなんだけど、

「覚えてないよ、そんなもの。」

「ていうか、読んでない。」

「真面目ね、上宮君。」

「俺なんか、必要なところだけ読んで、後は捨てたぞ？」

堂々と反論されてしまった。常識人は私1人だったらしい。

C h i t c h a t 労いと雑談（後書き）

次回はようやく少し進みます。 本当にすみません…

E x p e c t a t i o n 思わぬ再開（前書き）

ようちやく…！ようちやく、？と遷が再開です！

Expectation 思わぬ再開

その時、もうすぐ教室という所まで来た事に気が付く。

「松井、席順ってどうなってた？」

唐突な問いかけだったけれど、美樹は即答した。

「出席番号順よ。だから上宮君は最初の方。まあ、休みはいないみたいだったから、すぐに分かるよ。」

「そっか。ありがとう。」

「どういたしまして。あ、そう言えば、クラスにめっちゃかわいい子がいたの！」

いきなり目を輝かせ興奮しだした美樹にやや引きながら、無難な相槌を打った。

「へえ。どういう風に？」

「顔は勿論なんだけど、もう、雰囲気か！超可愛い！！確か名前は……」

「？……………？」

不意に、鈴を転がすような声が私の名前を呼んだ。その声は、遥

か昔に聞いたそれに、よく似ている。

振り返ると、人形のように可愛らしい、小柄な少女が私を見つめていた。140センチ少し位だろう。形の良い小さな頭を覆う明るい茶色の髪は、背中に少し届く程度。大きな瞳は、夢見るような、不思議な光を讃えている。その瞳に吸い込まれるような、不思議な錯覚を覚えた。

年賀状で見たままの、懐かしい少女だ。

「……漣？どうしてここに？」

小2の時に県外に引っ越した親友、青柳漣だった。中2の春に文通を止めてから音沙汰無しだった彼女が、何故か目の前に立っている。

漣はその大きな瞳をますます見開いて、私をじっと見つめた。

「え？え？？上宮君、彼女と知り合いなの？」

驚きのせいか、尋ねる美樹の声がひっくり返っている。視線をそちらに向けて、頷く。

「青柳漣。小2までこっちにいたんだ。幼稚園も一緒に、親同士も仲が良かったから、毎年年賀状をやり取りしてた。」

最近まで文通していたと言うと、あらぬ誤解を受けそうだったので、言わない事にした。美樹がロマンス万歳、という目をしてるし、いや美樹さん、それは無いから。絶対無いから。

「そうか、上宮君と一緒にの小学校の子、いなかったね、この中にはだから知らないんだ。」

納得した様子で香奈が頷く。そう、私達は出身小学校が結構バラバラ。美樹と江藤は一緒だが、後はそれぞれ違う学校。私も香奈に軽く頷いてみせ、もう一度澪に向き直る。

「澪、いつ戻って来たんだ？連絡の1つくらい、してくれれば良かったのに。」

返事は返って来なかった。澪は相変わらず、呆然とした表情で私を見つめている。

「澪……？」

目の前で手をひらひらと振ると、ようやく我に返ったようだ。

「あ、うん、ごめん。あの、春休みに引越したんだけど、ばたばたしてたから。去年の夏に決まってたけど、受験前だったから、連絡するのは遠慮したの。」

「そうだったのか。気を使わなくても良かったのに。」

そう言いながら、何とも言えない違和感を感じていた。

どうも、澪が挙動不審だ。そわそわしているし、何かを言おうとしてはやめて、というのを繰り返している。その上、どうも私を見る目がおかしい。久しぶりにあった親友：あ、いや、記憶修正が行われているのなら、友人か、ただの幼馴染に格下げされているだろう、に会ったにしては、どうも嬉しそうでは無い。自分から話しかけてきた割には、テンションが低い。

もしかして、久しぶりに会った男の子に、緊張しているってこと？
私は同性のつもりでいるけれど、澪にとっては当然異性だ。やはり、久しぶりに会った異性を相手にするのは、緊張するはず。
心の中で自問自答していると、澪が躊躇いがちに、こう言ってきた。

「？、その…。何か、随分、えっと、変わったね。」

……おかしい。何がおかしいか、言葉にできないけれど。何かこう、大きな食い違い、というか、見落としがあるような……

「…まあ、久しぶりだから。8年ぶりだろ。」

とりあえず無難に答えると、澪は首を振り、どもりながら言った。

「…ううん。そうじゃ、なくてね。去年の年賀状の写真と、随分、その、変わった、気が、して。」

.....年賀状？

「そうか？まあ、写真と実物って、印象がかなり違うからな。」

「実際には変わってないよなあ。ちびのままだし、声も高いし。上宮、身長に関しては、中1から変わってないんじゃないの？」

「うるさいな。伸びたよ、一応。」

「ほー？」

江藤の茶々に反射的に言い返し（実際の私は、3年間で10センチ以上伸びたんだからね！女子で162？って、大きい方だからね！）、

「まあでも、会っていない方が分かるんじゃない？ほら、よくあるでしょ。家族は気付かない変化に、他人が気付くっていうの。」

「ああ、そうかも。」

麻菜のフォローに頷いてみせながらも、

「まあ、そういう事だと思うよ、漑。漑はこのクラス？」

「1-D。」

「へえ、一緒だ。またよろしくな。」

「年賀状」という言葉に。 漣の態度に。

「…うん、よろしく。」

予感が、した。

「漣。今日、帰りにうちに寄って、母さんに顔見せに行かないか？
喜ぶと思う。」

とはいえ、ここでそれを確認するわけにはいかない。だから、話
はうちで。

「…うん、そうする。」

言葉の裏に隠されたメッセージを、漣はきちんと察してくれた。
後は、家に帰ってからだ。

「ええっ、良いなあ！私も行きたい！弟君を見てみたい！！」

…ただし、この予想外の事態を上手く片付けられたら、だけど。

美樹の言葉に、苦笑する。

「いや、そんな、見て面白いものでも…。それに、漣が来るなら、母さんを交えて昔話をする事になる。話に入れないだろうし、悪いよ。また次の機会にな。」

少なくとも、私が裕真と「兄弟」を演じられるようになるまで待つて欲しい。

「そうそう。俺たちは邪魔だって。なあ、上宮？それにしても、お前なかなかやるな。こんな可愛い子…」

「だから、単なる幼馴染だって。邪魔な訳ではないから。」

実際は邪魔なんだけど。来られるとマズいんだけど。

しかし江藤、私にそういう趣味は、無いからね？そんな目で見ないで欲しいな。

Expectation 思わぬ再開（後書き）

ちよつと後書きを編集です。

皆さんに質問です！登場人物紹介って、入れた方が良いですか？

結構皆さん入れているのですが…

感想辺りに意見を書いていただければ幸いです。

Introduction 新しい出会い（前書き）

今日はちょっと早めに更新です。

Introduction 新しい出会い

そのとき、先生達が階段を上がり切り、こちらへ向かって来た。
：正しくは、さっきから早く来ないか早く来ないかと、待ち構えていたのがようやく来た。

「あ、つと。タイムオーバーだな。江藤、お前F組だろ。早く戻った方が良くないか？富永も佐々木も、戻った方が良くぞ。松井、漣、中に入ろう。」

「あつ、そうだね。」

と香奈。少し慌てた様子だ。

「流石に初日から先生に目をつけられるのもね。じゃあね、上宮君。」

それに続いて、麻菜が手を振った。軽く手を挙げてみせる。

「まあ、話は今度、じっくり聞かせてもらうぜ？上宮。」

「何の話だよ…。まあいい、じゃあな。」

未だ誤解の解けぬ江藤を見送り、私達は、美樹、漣とともに中に入った。

途中で、こっそり美樹に尋ねる。

「なあ、その「可愛い子」って、やつぱり…」

「うん、青柳さん。まさか上宮君と仲良しなんて。後で紹介してね。」

目をキラキラさせる美樹。まさかそんなに「可愛い女の子」に喜ぶとは思わなかったよ。

「ああ、さっきは2人で話をしてしまったからな。悪い。」

「気にして無い無い。久しぶりだったんでしょ？まあ、今日ゆっくり話をしなよ。」

屈託の無い笑みに、ほっとする。澪を紹介するのを、すっかり忘れていたからね。

「まあ、俺とというより、母さんと、だろうけどな。」

そこで会話を打ち切る。先生が入ってきたからだ。

「皆さん、席に着いて下さい。ただいまからホームルームを始めます。」

活気溢れる壮年の男性。それが、第一印象だった。無駄にエネルギーの多い、数学教師と言った雰囲気。

「今年一年、このクラスを担当する、進藤龍太です。担当教科は国語です。よろしくお願いします。」

…けれど、意外にも丁寧な口調で自己紹介するその教師は、国語担当だった。どんな授業をするんだろう…。

「それでは、学生証を配ります。出席番号順にとりに来て下さい。」

その言葉に、私の前に座っていた男子が2人立ち上がった。慌ててそれに従う。

学生証は、薄型の半透明のカードだった。写真も名前も書いていない。ICデータを読み込むタイプらしい。こんな所まで電子化しているみたいだ。まあ確かに、個人情報ばれにくそうだけど。

私は「上宮」だから、すぐに順番が回ってきて、私の分を受け取る…

「…ん？上宮君、君は新入生総代として、講堂で生徒会長から渡されたはずでは？」

…はずだったんだけど、進藤先生にそう言われた。相沢先輩、渡し忘れたな…

首を振ると、先生は困った顔をした。

「そうですか…。それでは、明日にでも彼女から受け取って下さい。放課後はいつも、生徒会室にいるはずですから。」

「分かりました。」

お預け。しかも、また彼女と関わらなければならぬらしい。正直、役員やるような優等生とは、関わりたくないのだけれど。

席に戻ろうと踵を返すと、苦笑を堪える美樹と、疑問を目に浮かべた澪が目に入った。肩をすくめてそれに答え、席に戻った。

全員に学生証が行き渡った所で、進藤先生が再び口を開いた。

「それは3年間使いますし、卒業時に返却する事になっています。更に、パソコン室や図書室、更衣室などいくつかの部屋に入る時、鍵としての役割を果たしています。なくさないようにして下さい。」

：つまり、早く貰わないと、ものすごく行動を制限されるってことでは？

「それではこれから自由時間にします。それぞれ親交を深めて下さい。」

そう言って、進藤先生は教室を出ていった。

「……………」

時計を確認。ホームルームもどきが始まってから、10分も経っていない。

……早っ！

「なあ、上宮って、さっき挨拶してたよな？」

進藤先生の記録的なホームルームもどきに呆氣にとられていると、前の男子が声を掛けてきた。

「え？ああ、まあな。」

「ってことは、模試で毎回1位とってた、あの上宮??」

「…知ってるのか。」

私は今日初めて知ったのですが。

「そりゃあなあ。10月の模試とか、マジビビったし。天才だな。」

あつと、自己紹介が遅れたな。俺は飯島賢人。実田^{みたせ}瀬中出身。よろしく。」

「別に天才とか、そんな大げさなもんじゃないから。弥丘中出身、上宮?。こちらこそよろしく。」

ていうかその模試、何点取ったか知らないし。

飯島は、髪を短く刈り上げた、いかにもスポーツマンって感じの男子。顔はまあ…そこそこかな。声が大きいけれど、それが嫌じゃない。不思議と好印象を持てる少年だ。

「おい安藤、お前も来いよ。上宮、紹介するな。安藤俊希。中学が同じなんだ。安藤、弥丘中の上宮?。全国一位の、あの上宮だぜ。」
「…安藤俊希です。よろしく。」

安藤が頭を下げてきた。安藤は黒髪を無難な長さに切った、目のぱっちりした、大人しそうな細身の少年。でも、すばしこそうな印

象がある。陸上部の短距離専門、て感じ。

「上宮？です。こちらこそよろしく。…飯島、その肩書きは勘弁してくれ。」

頭を下げ返してから、飯島に渋面を作ってみせる。飯島が笑い声を上げた。

「事実じゃん。しかし、神様って不公平。上宮、モテるだろ？天は二物を与えずって、言ったの誰だよって感じ。」

「別に、モテたという覚えは無いな。」

実際、恋愛なんて無縁だったもんね。好きな子位は出来たけど、振られたし。

「そんな嘘要らねえし。さっきだって、可愛い女子に囲まれてたじゃん。」

…可哀想な江藤。カウントされていない。本当に女子に囲まれていたのは彼だというのに。

「いや、あれは中学のクラスメイト。漣は昔の幼馴染。」

「名前を呼び捨てとか、凄いじゃん。久しぶりに会った女の子だろ？そついうのって、盛り上がらねえ？」

…こういう話って、女子の専売特許じゃなかったっけ。何かギラ

ギラしてるんですけど。

「別に。」

首を振ってみせたら、飯島が実に残念そうな顔をした。言葉短に否定されると、追求出来ないよね。

「2人とも、部活はどうするんだ？」

チャンス逃さず、話題転換。漣の話は、今はしたくない。

「ん、俺は野球部だな。小学校から続けてたし。安藤は陸上続けるの？」

「うん。走るの好きだから。」

嬉しそうな顔で語る安藤。近いうちに、クラスの女子から「可愛い男の子」に分類されるだろう。

「そういう上宮は？」

「迷い中。中学まで、空手を続けてたけど。」

男子と女子は実力が大きく違う。筋力がものを言うからね。諸事情を鑑みると、私が出来るかというと、まあ、無理だろう。

「ふーん。続ければ良いんじゃない？」

「そんなに強くなかったしな。新しい事を始めるのも悪くない。」

女子にはよくある理由だと思っけれど、男子に通じるかな？

「まあ、そうかもな。」

良かった、通じたみたいだ。

J o k e 誤解と親交（前書き）

今回長めです。切れなかった…

J o k e 誤解と親交

「上宮君、ごめん！学生証渡すの忘れてた！！」

いきなり大きな声が廊下から聞こえてきた。振り返ると、ポニールテールの少女が拝むように手を合わせている。

…相沢先輩。生徒会室に行かなくて済んだのは良かったんですけど、そんな大きな声を出さないで下さい。おかげでクラス中の注目を集めているのですが。

廊下に出て、教室から背を向ける形で相沢先輩と向き合った。

「いえ、状況が状況でしたから。」

そう言って、学生証を受け取るうとしたが、相沢先輩は渡さない。「でも、さっきあれだけ話をしたのに、すっかり忘れてて…。さっき進藤先生に言われなかったら、そのまま忘れちゃってたわ。ごめんね。」

…この先輩、慌てると周りが見えなくなるタイプらしい。この視線の雨の中、余計な事を口走りつつ、相も変わらず良く通る声で重ねて謝ってきた。

「気にしてません。こちらから生徒会室に伺うつもりでしたのに、わざわざ持ってきていただいて、ありがとうございます。」

腹をくくって、丁重に礼を言った。後ろは無視無視。

「そんな、私が悪いのに、取りに来てもらうわけにはいかないわよ。じゃあ、遅れちゃったけど、これ、学生証。改めて、入学おめでとう。」

良い先輩だ。これで空気が読めれば言う事無しなんだけど。

何故かさつきから、特定の人間の顔が妙に鮮明に見える気がして仕方が無い。飯島の期待に溢れた顔とか、安藤のびっくりした顔とか、美樹の興味剥き出しの顔とか、… 漑の生暖かい目とか。

「ありがとうございます。相沢先輩、お忙しい所、時間を割いていただいて本当に済みません。」

「うつん、平気よ… って、ああ！ そうだ、岩瀬君とこの後の打ち合わせ！！ ごめんなさい上宮君、じゃあまた！」

作戦成功。入学式の日、生徒会長が暇な訳が無いのだ。わざわざ「お忙しい所」を強調したのが功を奏したらしい。

— 安心して緩む心に鞭打って、何事も無かったかのような顔で教室に戻った。

案の定、真っ先に飯島がからんできた。

「上宮、お前聖人君子のような顔して、やるなあ。超美人生徒会長と初日であれだけ仲良くなるなんて。」

「…大概うざくなってきたのですが、そろそろ邪険に扱っても良いでしょうか。」

「何か、誤解がある気がするぞ。単に、挨拶の件でお世話になっただけだつて。」

世話になったというか、世話にならざるを得ない状況に文字通り引きずり込まれたというか。

「いやー、それにしても雰囲気良かったよ、上宮君。あの短い時間で「あれだけ」ってつく位話をするなんて、やるじゃない。」
美樹まで乱入してきた。飯島がやや驚いた顔をしている。

「アドバイス貰ってたんだよ。あの状況だったからな。」

ああ、松井、紹介するよ。飯島賢人と安藤俊希。2人とも実田瀬中出身だそうだ。飯島、安藤。松井美樹って、中学のクラスメイト。

嘘を言わずに誤魔化して（実際アドバイスは貰いまくった。何言ってもいいか分からないもんね）、互いの紹介に話題をすり替える。

「あ、どうも。」

「よろしく。」

「よろしくお願いしまーす。」

ちよつと固い感じながらも、3人が言葉を交わし合う。

「でも？、結構楽しそうだったね。美樹もそう思うでしょ？」

上手く逃げられたかと思った矢先に、余計なことを言う漣。漣、分かっててやってるよね？わざとだよな？

「楽しそうって何だよ、漣。普通の会話だろ。」

「あ、漣もそう思う？だよなー。」

私の反論はあっさり美樹にスルーされた。それにしても…

「もう仲良くなったんだな、松井。」

下の名前を呼び捨てとは、随分と気を許し合ったようだ。

「任せて。でも、上宮君との関係についてはまだ追求してないから、安心して頂戴。」

ああ、そんなことを言うとは…

「ん？やっぱ、何かあるんだな？」

ほら、飯島が食いついた。

「無いって。単なる幼馴染。で、漣。残りの2人だけ…。」

「知ってる。飯島賢人さんと安藤俊希さん。さっき美樹の後ろで聞いてた。」

「俺も知ってるぞ。廊下で聞いてた。青柳漣さんだろ。」

…同じ手は通用しなかったか。それにしても漣、悪ノリし過ぎ。

「で？実際の所どうなのよ。上宮、他にも誰か隠してんじゃねえの？」

にやにやと聞いて来る飯島。人聞きの悪い。私は女の子の方が話しやすいんだし、良いじゃない、少し位。

「元々隠し事なんてしてないだろ？ちゃんと説明したじゃないか。」

実際は、存在自体が隠し事そのものですが。

「ふーん、ま、良いや。そういう事にしといてやるよ。」

とりあえず引き下がってくれた飯島にほっとしながら、美樹と漣に話しかける。

「2人とも、俺達と話してていいのか？女子と話した方が良いんじゃない…。」

「上宮君、私は上宮君と違って、素敵な異性と話して自己紹介が出来ていないなんて、羨ましい事は無いからね？」

「？、気付いていないの？もう先生が出て行ってから、30分経ってるんだよ。とくに携帯のアドレス交換まで終わった。」

「で、皆、異性と話をするかどうか、葛藤中だったんだよ。まあ私がその葛藤を解消してあげたけど。」

2人の反論に教室を見回すと、確かに緊張気味に会話を交わす男女の姿がちらほら見えた。微妙に人口密度に偏りがあるのは…まあ、仕方が無いよね。男って哀れ。

…って、あ。

「俺、飯塚と安藤としか自己紹介出来て無い…。」

ショック。わざわざ岩瀬先輩に気を使ってもらってまで、戻ってきたのに。馴染めるように、なるべく話をしようって思ってたのに。

「まあ、明日から頑張れよ。上宮に声掛けようっていう男子、そう多くはないだろうから、自分から声を掛けないとな。」

「……俺、そんなに嫌われるタイプ？」

飯塚の言葉に、ものすごく精神的なダメージを受けた。

前は、決してそんな事は無かった。誰もが気さくに声を掛けてくれたし、直ぐに仲良くなれた。クラスが変わっても、「友達が出来るか」という心配は、した事が無かった。

それなのに。今は、自分から声を掛けない限り、話しかけてもらえない程、他人と距離が出来てしまったらしい。

「…どう思う？あれ、嫌味か？」

「いや、上宮君、多分気付いてないだけだと思っよ…」

「あれだけ目立てば当然よねー。」

「まあ、？は昔から少し抜けてるから…」

落ち込む私に聞こえないようにする配慮0の内緒話を交わし、安藤がこちらへやってきた。

「上宮君、嫌われてるんじゃないくて、敬遠だから。成績が良いと、それは仕方が無いと思うよ？」

言葉の意味をしばらく考えたが、よく分からない。

「どういう意味だ？」

安藤が黙り込む。美樹が苦笑して口を開いた。

「上宮君、成績とか拘らないタイプだけど、気にする子はとっても気にするから。香奈を見れば分かるでしょ？」

「佐々木？……ああ。」

ようやく分かった。

香奈の家は、両親が勉強熱心だ。昔から、良い成績を取らないとものすごく怒られてきたそうだ。そのせいで、自分より頭の良い子がいると勝たなきゃって思うようになったと言っていた。強迫観念に近いものらしく、毎回模試の度に凄く結果に拘っている。

香奈のような子にとって、成績のいい子は邪魔だろう。少なくとも

も、自分から話しかけようとは思わないはずだ。

納得した私を見て、美樹が続ける。

「まあ上宮君、拘らないからね。話していくうちにそれが分かれば、相手も楽に話してくれるんじゃないかな。香奈もそうだったしね。」

…最後の事だけは、もう、分からない。本当に香奈は、私に何の隔意も持たずにいてくれたんだろうか。

「ん、頑張るよ。サンキユ、松井。安藤も説明アリガトな。」

「いいえー。素直な所が上宮君の良い所。」

「ちゃんと説明できなかったけどね。」

笑顔で返してくれた2人に、ほっとした。

「…おい青柳さん、あれで良いと思うか？」

「良いんじゃないかな？もう1つの理由は、？に理解できると思えない。」

「…マジか？」

「うん、絶対無理だと思う。」

傍らでよく分からない会話を交わしている飯島と漣。漣、その笑顔はどういう意味？

とにかく、私は今日、2人とちゃんと話せるようになった。まずはそれで良い。少しずつ、皆と話していこう。

その後、先生が戻ってきて帰るように言うまで、私は4人と会話していた。

L e a v i n g S c h o o l 親交（前書き）

また切れなかった…
再び長めです。

Leaving School 親交

放課後、私は？と一緒に帰る事になった。？の家に、招待されたから。

きつとそこで、説明してくれるはず。そう思って、今日はずっと話を合わせてきた。でも、もう我慢の限界。早く、早く聞きたい。

「？…」

「あつ、上宮君、漣！一緒に帰ろー！！」

声を掛けようとしたその時、美樹が声を掛けてきた。

「あ、美樹。じゃあ私も。」

「私もー。」

「んじゃ、俺も。」

続いて、廊下から、さつき？と一緒にいた3人が顔を覗かせた。

「ああ、構わないよ。さつき紹介し損ねちゃったしな。」

富永、佐々木、江藤。青柳漣、俺の幼馴染だ。県外から来たし、仲良くしてやって。漣、富永麻菜、佐々木香奈、江藤一馬。中3のときに、クラスが一緒だったんだ。ああそう言えば、江藤以外は1年から一緒だな。」

「青柳漣です。よろしくお願いします。」

「富永麻菜です。麻菜って呼んで。よろしくね、青柳さん。」

「佐々木香奈。香奈で良いから。よろしくお願いします。」

「麻菜、香奈ね。分かった。私の事は、漣って呼んでね。」

気さくに私を受け止めてくれた麻菜と香奈に、笑顔を向けた。

「江藤。よろしくな。つーか上宮、何気に俺を仲間はずれ扱いしたな？」

「まさか。そんな訳無いだろ。」

軽く睨む江藤君に、？は笑って首を振った。

「江藤君も、よろしく。」

今日一日で、たくさんの子と話が出来た。それに、彼らとは仲良くなれそうだ。嬉しさも一塩で、江藤君にもにつこりと笑ってみせた。

すると、何故か慌てた様子で目を逸らす江藤君。どうしたのかな？
？に目で聞いてみたけれど、やれやれという顔をされただけだった。

「さて、帰るか。と言っても、大通りの終わりりで別れるけどな。」
「上宮お前、わざわざそういう事を言うか。そんなに青柳さんと2人になりたい訳？それなら邪魔はしないぜ？」

半眼の江藤君に、？は顔を顰めた。

「お前、まだそれを引き摺っていたのか…。漣とは、単なる幼馴染だっって言ってるだろ。」

「ジョークジョーク。そんなムキになるなつて。」

ひらひらと手を振る江藤君。あくまでからかっているだけみたい。まあ実際、私もそれは否定したい所だ。はつきり言つて、あり得ない。

「ねえ、上宮君。漣の事名前で呼ぶなら、私達も名前で呼んでよ。」
「え？」

突然の麻菜の言葉に、？が戸惑った顔をした。

「あ、いいねー、それ。」

「私達も3年間一緒だったんだし、問題ないよね。」
美樹と香奈もそれに頷く。

「俺はそういう話無しかよ……。」

「だって、江藤君が誰かを名前で呼ぶとこ、見た事無い。」

江藤君のぼやきに、美樹が言い返す。？は相変わらず困惑顔だ。

「漣は小さい頃からそう呼んでたから違和感無いけど……、高校にもなつて、男子に下の名前で呼ばれるの、嫌じゃないのか？」

「別に。気にならないよ。」

「あ、じゃあ、あたし達も？君つて呼べば良いのかなー？」

「ああ、それいいかも。」

麻菜、美樹、香奈に口々に構わないと言われ、？はしばらく迷ったのち、ゆっくりと口を開いた。

「麻菜、美樹、香奈。良いのか、これで？」

「うん！じゃあ、…？君で！」

「？君。おー、男の子を下の名前で呼ぶの、新鮮。」

「改めてよろしく、？君。」

「…別に呼び捨てでも良いぞ。よろしく。」

にこにこ名前を呼ばれ、？も控えめに笑顔を返した。…けど。

「そろそろ行かない？邪魔になってるよ。」

私の提案に、皆が気付いたらしい。廊下で立ち止まって、交通をせき止めている事に。

「わ、マズい。行こうか。」と麻菜。

「そうね。」と香奈も歩き出す。

「江藤君、いつまでそうしてるのー？」

「…うるせえ。くそ、上宮め…。」

美樹の問い掛けに唸る、廊下の隅で肩を落として項垂れている江藤君。その肩に、？が手を乗せた。…？、それは逆効果だと思う。ほら、背中震えてるし。

「行こうか、？。」

「え？ああ、うん。」

？が頷いて江藤君から離れ、私と並んで歩き出す。その顔には既に、さつきまでの影は無い。ほっとした。

校舎を出て、門までの一本道を歩く。たくさんの上級生から、ピラを手に押し付けられるように渡された。

「ああ、部活動誘かあー。」

門を出た所で、ピラに目をやった美樹が納得したように頷く。

「本格化するのは明日からって書いてあったな。今日のうちに目を通してもらおうってことだろう。」

「も頷く。？の事だ、パンフレットとか全部目を通しているのだろう。そんな所まで普通は覚えていない。」

「どこに入る？私は吹奏楽続けるつもりだけど。」

麻菜が美樹に尋ねる。

「んー、バレーを続けるか弓道をやってみるか、かな。江藤君は？相変わらずラグビー？」

「何だよ、相変わらずって。当たり前だろ。上宮だって、空手続けるんだろ？」

江藤君が美樹に言い返してから、？に振った。

「いや、考え中。何か新しい事を始めるのも良いかなって。」

「おい、冗談だろう？」

首を振る？に、驚いて江藤君が聞き返す。

「いや、冗談じゃない。」

「まあ多分、無理でしょうね。？君、先輩達に狙われてるだろうから。」

今度は麻菜だ。？が首を傾げる。…？、忘れてるよ。

「何で？」

「？君ったら、全中出ておいて狙われない訳無いよー。」

美樹が笑いながら手をひらひらと振った。そう、手紙にも書いてあった。

「いや、中学の空手の大会って、出場者が少ないからなあ…。まあいいか。それより、そういうのって、知られているものなのか？」

「…うん、？君はもう少し自分に関しての情報とか噂に、耳を傾けた方がいいと思う。」

香奈が疲れたように言った。

「う…。覚えておく。」

何故か言葉に詰まった様子で頷く？。

「漣は？美術部か？」

無理に会話を逸らそうとしているのが見え見えの？に、内心苦笑しながら答えた。

「うん。それと、コーラス部にも入るつもり。」

高校からは、複数の部活に入る事が出来る。私はずっと絵を描いてきたけれど、歌も大好き。だから、この高校にコーラス部があるって聞いて、本当に嬉しかった。

「ああ、いいなそれ。漣は音楽好きだったもんな。」

？が笑みをこぼす。昔と変わらない無邪気なそれは、けれど今は女の子を夢中にさせるものになった。それを見た麻菜達女子が顔を

赤くしているんだけど、？は気付かない。

「そ、そう言えば、担任の先生どういう感じだった？Aは―」

麻菜の言葉を皮切りに、担任の先生の情報交換になった。もしかしたら授業担当になるかもしれないから、そういう情報は大事だ。

あつという間に大通りの終わりにたどり着いた。

「あ、もう着いちゃった。あつという間。」

麻菜が感慨深げに呟いた。手を振って、そのままバス停へと向かう。彼女はバス通学らしい。

「楽しい時は早く過ぎるってねー。じゃあまた。ほら行くぞ、江藤君。」

「お前とつてのが、テンション下がる…。俺も青柳さんみたいな…。」

「何か言っただー？」

「いーや。じゃあな、上宮、佐々木、青柳さん。」

美樹と江藤君が仲良く言い合いながら、道路を右に曲がって去っていった。

「それじゃあね、？君、漣。また明日。」

香奈が自転車置き場に向かった。

？と私は皆を手を振って見送った後、並んで歩き出した。向かうのは、懐かしの？の家。昔はよく遊んだ、大きな家。お母さんが優

しげで、お父さんは無口だけど、私が来るとお菓子を出してくれて、まだ小さかった弟君は、ニコニコしながら片言で話しかけてくれたのを覚えている。

？の家に着くまでに掛かった時間は、およそ5分。それまで私達は、一言も口をきかなかった。

Leaving School 親交（後書き）

何だか？がだんだん淒い子になっていく…。

最初はここまでにするつもりは無かったのですが。

あ、ちなみに。？は江藤君が落ち込んだ理由、女子に置いてきぼりにされたからだと思っています。だからこそその慰めですね。…勿論、事実はかけ離れています。

E x p l a n a t i o n 事実と慰め（前書き）

ようやく、と言っべきでしょうね。

長らくお待ちしました。 澪が事情を知ります。

Explanation 事実と慰め

記憶と寸分変わらない一軒家の前で、私達は立ち止まった。？が鍵を取り出し、ドアを開けた。

「ただいま。」

「おじゃまします。」

少し緊張しながら、玄関に上がる。私達の声に答える人は、いなかった。

「？、お母さんは相変わらず？。」

「うん、父さんも母さんも、夜遅くまで働いてる。……裕真、そこにいるのは分かってる。さっさと出てこい。お客さんに失礼だろ。」
「うう、気付いてたか……。」

階段の影から、中学生くらいの男の子が出てきた。裕真ってことは、つまり……。

「漣、覚えてる？弟の裕真。裕真……は覚えてないだろうな。俺が小2の時に引っ越した、青柳漣。何度かうちにも遊びに来てる。」

「覚えてる訳無いじゃん。俺幼稚園だよ？」

「私は覚えてるよ。久しぶりだなあ。」

見上げるようにして裕真君に笑いかけた。裕真君は少し緊張気味

だ。

「…さて、裕真。何か言う事があるんじゃないのか？」

不意に？がにっこりと笑って裕真君にそう言った。凄くいい笑顔
なんだけど、目が笑ってない。眉目秀麗な男の子の笑顔ってただで
さえ迫力があるのに、微妙に漂う怒気と合わさって、かなり怖い。

「ははははは…。ね…兄ちゃん、怖い。」

顔を引きつらせる裕真君。

「何か弁明は？」

「ありませんごめんなさいっ！」

涙目になりかけながら謝る裕真君に、？はとどめを刺した。

「裕真、お前、今日から2週間、掃除・洗濯・風呂当番。」

「えーっ！酷い！！何もそこまで…」

「裕真が馬鹿やったおかげで、どれだけ大変だったか説明しようか
？」

「うつ…」

裕真君が抗議するも、？の言葉に黙り込む。

「ねえ？、何の事？」

「…あー、まあ、濡だからいっか。こいつ、俺が外出している間に

受けた高校からの伝言、伝え忘れたんだよ。新入生総代の挨拶、選ばれてたって知らなくて、リハーサルも不参加。実はぶつつけ本番だったんだよね、おかげで。」

「……そうだったんだ。」

それはまあ、怒るだろう。

それにしても？、あれ、即興だったんだ。ものすごくいい出来だったから、かなり練習したのかと思ったんだけど。

「さて、部屋に上がろうか。裕真、今から大事な話があるから、部屋に来るなよ。掃除でもしてろ。」

「兄ちゃん、いくら幼馴染でも、女の子をいきなり部屋に上げたら、母さんに怒られるよ?」

からかい気味の裕真君の言葉。あれだけ脅されてて、もう復活している。大したものだ。

…裕真君も、知らない、のかな。

「裕真、1つ言っておく事がある。遷の家には、去年まで毎年、年賀状を送っていた。」

「……あの、写真入りの?」

そのやり取りで、ああ、知っているのかと分かった。

「そういう事。という訳で裕真、しつかり掃除してなさいね？」

最後だけ口調を変えた？は、「だからやめろって！」と叫ぶ裕真君を無視して、私を連れて2階に上がった。そこに？の部屋がある。

「座つて。」

？が机から椅子を出して、勧めてきた。頷いて座ると、？はベッドに腰掛けた。

「さて、澤。改めて、久しぶり。」

そう言つて、？は笑みを浮かべた。

頷いた後、少し迷ったけれど、単刀直入に聞く事にした。

「…？、何があつたの？」

？が困惑した表情を浮かべた。

「……正直、未だによく分からないんだ。」

？はこの4ヶ月弱の事を話してくれた。冬休みが始まつた日、ふと気が付くと自分が様変わりしていたこと。誰もか？を、昔から男子だつたと思つていて、微妙に記憶が変わっていること。戸籍もいつの間にか書き換えられていたこと。

「どうしてこうなつたかとか、何があつたのかとか、さっぱり分からない。けど、他にどうしようも無いから、こうやって皆を騙して

る。」

「？はそう話を締めくくって、自嘲気味の笑みを浮かべた。

「騙してるだなんて……」

「事実だ。澪ももう、分かってるだろ？いくら周りがそう思い込んでいるとはいえ、俺に役者の才能があるとは思わなかった。」

反論しかけた私に、？がそう言った。冗談めかしてはいるけれど、目は笑っていない。それで、納得せざるを得なかった。

幼い頃、ずっと一緒にいた私の目から見ても、？は見事に男の子を演じている。所々、仕草に昔の癖が残っているけれど、それは私だから辛うじて分かるくらい。その癖も、男子が持つていても不自然じゃないものばかり。どう見ても、ごく普通の男子生徒だ。

「それにしても澪、よく話しかける気になったな。講堂で見て、驚いただろう？」

そう言っ？が笑う。それに合わせて笑ってみた。

「うん。？は清条高校に入ったと思っていたのに、掲示板に名前が無くて、凄く不思議だったんだ。で、講堂で名前を聞いてほっとしたら、男の子が出てきたんだもん。アナウンスが間違ってるのかと思った。」

「掲示板……ああ、そう言えば男女別だったな。普通の高校なら、クラス毎に名前を掲示するから、同姓同名の奴がいるんだな、と思うだけだっただろうに。」

納得したように頷く？。

「うん、それだったら話しかけなかったと思う。あの時は、半信半疑だったけど、？、当たり前顔して私の名前を呼ぶんだもん。」

「誰も驚いた事が無かったから、澁もそうだと思ったんだよ。」
そう言って？が苦笑する。そっと聞いてみた。

「ねえ、誰も気付かないの？」

「……ああ。母さんと父さん、裕真。知ってるのはそれだけ。じいちゃんばあちゃんですえ、男だと思ってる。それにしても、最初俺を見た時の父さん達の反応はすごかった。もう少しで追い出される所だったな。」

そう言って、？が小さく笑う。まるでどこかが痛いのを、堪えているみたいに。

「……裕真君、兄ちゃんって呼ぶんだね。」

「今朝から。言葉遣いも変えろって言われた。ぼろを出さない為には、仕方が無いな。……まあ、あいつは単に、気味が悪いらしい。」

そう言って？は、肩をすくめた。

「ま、気持ちは分かる。これが逆ならまだしも、男が女言葉つかうのは、生理的に気持ち悪いもんな。」

？はおどけた顔をして、最後は独り言のようにそう言った。無理に明るく振る舞う？に、我慢できなくなった。

椅子から立ち上がり、？に歩み寄る。

「漣？」

当惑気味に見上げる？の肩を、そつと抱きしめた。顔は、あえて見ない。

「気持ち悪くなんか無い。？は？だよ。」

「……漣。」

「私の前でまで、無理する必要ないんだよ？気を使わなくていいの。」

そう言つて、腕に力を込めた。

『新しい友達が出来たんだ。個性的だけど、すつごくいい子。』

『今私は、麻菜、香奈、美樹つて友達といつも一緒なの。親友つて言つていいと思う。毎日馬鹿な事しながら、大騒ぎしてる。漣にも紹介したいな。』

中学に入ってから、届いた手紙。文章から、文字から、楽しそうな雰囲気伝わってきた。ちよつと羨ましかったけど、？に仲がいい子が出来て、私も何だか嬉しかった。いつか会つてみたいと思つていた。

けど、それが実現した時には、彼女達は覚えていなくて。今日久しぶりに彼女達の名前を呼び、？「君」と呼ばれた時、？は凄く寂しそつだった。

擦じ曲げられた記憶。皆から、？が知る過去が消され、？の知らない過去が勝手に刻まれて。そのまま皆に話を合わせて、距離を置

いて。平気な訳が無い。

それでも笑っている？を見ているのは、辛い。

「今まで、大変だったね。ずっと独りで、頑張ってきたんだ。」

？の肩が、大きく揺れた。強張る背中を優しく撫でる。

「力になれなくて、ごめんね。でも、もう大丈夫だよ。私は？の事、ちゃんと覚えているから。？の、味方だから。」

「…漣。今の状況、他人から見るとかなりマズいんだけど。自覚ある？」

？は笑いながら冗談めかしてそう言うけれど、声が、震えていた。

「関係ないよ。言ったでしょ、？は？だって。…だから、我慢しないでいいんだよ。」

？は黙って、私の肩に額を押し付けた。少しして、小さな嗚咽が聞こえてきた。頭にそつと手を置く。

私はそのまま、？が泣き止むまでずっと、？を抱きしめ、頭を撫でていた。

A m u s e m e n t じゃれ合い

漣に全て話して、随分気持ちが軽くなった。知らず知らずのうちに、いろいろ溜め込んでいたらしい。漣が私の事を覚えていて、事情を知ってなお、私を受け容れてくれた。その事が、ずっと目を逸らしていた感情に気付かせてくれた。

ようやく涙が収まって、私は漣から離れた。人前で泣くのなんて、何年ぶりだろう。ちよつと恥ずかしい。

漣がハンカチを差し出してきた。私は俯いたまま、涙を拭った。もう大丈夫だと分かってから、顔を上げ、ハンカチを返す。

「ごめん、ありがとう。…漣のおかげで、楽になった。」

「どういたしまして。…うん、何だか？らしくなった。」

そう言つて漣が、優しく笑った。

「……私ってそんなに、泣いてたっけ？」

きまり悪くて、わざとそんな言い方をしてしまった。

「そういう意味じゃないよ。」

そう言つて漣は、私の隣に腰掛けた。男の子の隣は嫌だろうと思つて椅子を勧めただけど、漣は気にせず座つてくれた。その行動1つ1つに、ほつとする自分がいる。

ちよつと情けないなあと思いながら、漣の方を向いた。

「という訳で、漚。悪いけど高校では、話を合わせてもらっていい？ 今日みたいな感じで大丈夫だと思う。」

「うん、いいよ。？「ちゃん」って呼ぼうかと思ったんだけどね、最初。」

「……………よかった、思い直してくれて。」

それを実行に移されてたら、どうなっていた事か。

「その代わり、ちょっとお願い聞いてもらっていい？」

突然いたずらっぽく笑う漚に、戸惑いながら頷いた。

「…私に出来る事ならね。」

頼んでいるのは私の方なので、拒否権は無い。それに、ここまでしてもらった漚に、お礼をしたいという気持ちもある。

「あのね、卒業まで3年間、勉強見てほしいの。」

「はい？」

思わぬ頼み事に、変な声を出してしまった。

「私、？の名前、いつつチェックしてたんだよ？高校に入ると勉強が難しくなるって聞いていたけど、？に教えてもらえればすごく安心。駄目？」

そう言って漣は、上目遣いに私を見つめてきた。夢見るような大きな瞳に、私が映っているのが見えた。

「…漣。私だからいいけど、それは男子の前でしない方がよいよ。」

暴力的な可愛らしさだった。笑顔だけで男子には効果満点なのは江藤で実証済み。こんな事をされたら、理性を保てる男子はいまい。

「んー、？に言われたくないなあ。」

「え？」

「うっん、こつちの話。で、良いかな？」

謎めいたことを言った後、漣が首をちょっと傾げて、再び「お願い」してきた。明るい茶色の髪が、さらさらと音を立てて流れる。可愛い。同性から見ても可愛すぎる。成程、美樹の気持ちが少しわかった。

「まあ、それくらいなら良いよ。私が授業についていけるかどうかも分からないけどね。」

頷くと、漣が輝かんばかりの笑顔になった。

「？なら大丈夫だよ。ありがとう。で、もう1つなんだけど。」

「…1個じゃないんだ。」

「今のは秘密を守る条件、もう1つは話を合わせる条件。」

「漣、ちゃっかりしてるね…。」

まあ、私に断るという選択肢は無いけど。

「？、もう少しこっち来て。」

「え？」

今の私達の距離は、およそ30センチ。更に近づくととなると、体が触れそうなんだけど…。

戸惑いながらも、ちょっとだけ漣の方に近づいた。漣がにこっと笑う。

「じゃあ、お願い。そのまま、動かないでね。」

その言葉が終わると同時に、漣がいきなり近づいてきた。華奢な腕が首に巻き付く。ふわりと甘い香りがして、唇に何か柔らかいものが触れた。

……………え？

「はい、？君のファーストキス、もらいました。」

頭が真っ白になって固まる私から離れて、元の場所に戻った漣が、につこりと笑って言った。その言葉で、柔らかいものが漣の唇だったと、ようやく理解する。

「っ、な、な、な、な、……」

完全なパニック。壊れたように同じ音を発音する私に、漣がクスツと笑った。

「あれ？もしかして、文字通りのファーストキス？」

その言葉で、ようやく言語を取り戻した。

「み、漣！？何考えてんの！？自分が何をしたか、分かってる！？」「分かってるよー。？、何を慌てているの？」

大慌ての私を見て、漣は暢気に笑っている。

「いや、何をつて！相手私だよ！？よく平気でそんな事……」

必死でそう言う私に、漣が笑顔のまま首を傾げて、爆弾を投下した。

「んー、でも、ホントに男の子とキスした訳だし。私もこんなカッコイイ男の子とキスできてラッキーっていうか…」

その言葉に、ようやく気付いた。そう、私は今男子で、漑は勿論女子。

つまり。私、「少年」上宮？は、「少女」青柳漑と、たった今キスをしてしまった、という事になる。

音を立てて完全に固まる私に、漑が声を上げて笑った。

「あはは、？が面白い。そんなにびっくりするとは思わなかった。」

当たり前だよね！？びっくりっていうか、ショックなんですけど！

「バカ！もう、何考えてるの！」

A m u s e m e n t じゃれ合い（後書き）

女の子達その他愛のない遊びです。

？はマジで慌てるので、昔から皆におもちゃにされていました。

Each Opinion 感謝

大声を上げた時、ドアが開いた。

「……姉ちゃん、としか呼べない……。本当に騒音公害だから、静かにして。」

裕真だった。疲れ切った顔をして私を睨んでいる。

「漣、ちょっとそれ取って。」

「はい。」

その説明をする前に注文通りのものを手渡して来る漣。心は同じだ。

私は、枕を思いつきり馬鹿ゆしまに投げつけた。うん、なかなかいい音がした。

「っ、痛い！何するんだ兄ちゃん！」

「はい、？。」

何か言う前に漣が手渡してくれた人形を、もう一度投げつける。

「部屋に来るなって言ったよね？」
「ごめんなさい！」

にっこり笑って優しい声で叱ったら、引きつった顔で謝ってきた。
うん、ようやく少し学んだらしい。

「でも兄ちゃん、少しは手加減して。」
「十分したけど？」

弟の抗議に反論する。実際、この距離があるのだから問題ないはずだ。

「4ヶ月前とは違う！」
「あ、そっか。」

…と思ったけど、そうか、忘れてた。どうも漑と話していて、元に戻った気でいた。これは学校で気をつけねば。

「ふーん、力も増したのか…。」
何となく、手を開いたり閉じたりする。試した事は無かったんだけど。

「これなら部活も大丈夫じゃない？」
漑の言葉に、首を振った。
「そこまでは増してないし、何より体格差がね。1回男子と遊びで試合した事あるんだけど、全然勝負にならなかったんだ。動きの速

さとかも全然違うし。」

「…でも、拒否権無しだよな。」

「…やっぱ、無理かなあ。」

こんな事なら、大会なんて出るんじゃないかな。というか、記憶を消すくらいなら、記録も消して欲しかった…。

「俺無視！？しかも兄ちゃん、言葉！」

「裕真君は今いちや駄目って言われていたでしょう？言葉遣いは、私が良いよっていったの。裕真君が文句を言う筋合いは無いよ？」

裕真の文句は、（裕真にとって）思わぬ漑の言葉によって切り捨てられた。

漑って小さい頃から、怒ると怖いんだよね……。

裕真が騒音公害と言った時から既に怒っていた漑は、ここに来て限界に達したらしい。その人形のような可愛らしい外見から漂う冷気（麻菜達4人あわせたより遥かに強力）に、裕真が凍り付いた。

「裕真君、悪いけど女同士の話し中なの。出てっってくれるかな？」

漑のとどめの一言に、裕真が瞬時に消え去った。逃げ足早いな、

あいつ。

「漣、ありがとう。」

本気で怒ってくれた漣にお礼を言って、頭を撫でた。

「？は優しすぎ。怒って良いのに。」

漣の言葉に、苦笑する。

「…実際、あいつには感謝してるから。いきなり姉貴が兄貴になつたっていうのに、全く変わらず接してきてくれるからね。口ではああ言うけど、戸惑ったり、本気で気味悪がったりした事無いんだよ。」

「でも…。」

「…まあ、こう思えるようになったのも、漣のおかげかな。昨日までなら、黙って頷いてた。」

頭で納得して、状況に適応する為に、無理矢理感情に蓋をしていたら、いつの間にか感情が麻痺していた。余裕が出てきたせいかな、どうも今日は学校でもいろいろ考えていたけれど、中学の時はそれこそ何も感じなかった。…皆が、「私」の事を忘れていたにもかかわらず。

それを漣に気付かせてもらったおかげで、言い返す事が出来るま
でになった。もう大丈夫だ、と思う。

「とはいえ、あいつも調子に乗ってたからね。漣に怒られて、少しは反省したと思う。だから、ありがとう。」
いたずらっぽく笑うと、漣は溜息をついた。

「…もう、？のお人好し。」
ちよっと不機嫌な声でそう言っつて、漣は立ち上がった。

「そろそろ帰る。お母さん達には、また今度会わせて。」
「うん、休みの日にでも。2人の予定を確認しておく。…送るよ。」

外を見ると、日が傾きかけていた。それほど時間のかかる説明でもないのにこうなっちゃったのは…まあ、間違いなく私のせいだ。

「うーん……。別に良いのに。」
「女の子の一人歩きは危ないよ？」
言ってから、自分の言葉に笑ってしまった。つられて漣も笑い出す。

「分かった。じゃあお願い。ついでにお母さんとお父さんに会っていつて。」
「…事情説明をしてからの方が、良いと思う。」

またうちの両親の時のような騒ぎはごめんだ。特に漣はとっても可愛いし、確かお父さん甘甘だったから、掴み掛かれかねない。

けれど遷は、首を振った。

「口で言っ
て信じると思
う？」

…無理でしょうね。私だっ
たら信じない。

「また今度、
じゃ駄目？」

「？に会
うと思っ
て言っ
ちゃっ
たの。話
聞かれ
た時に
困る。」

「…分
かった。」

どうやら、腹をくるしか無いらしい。

今日はまだまだ終わらないようだ。

E a c h O p i n i o n 感謝（後書き）

裕真はちよつと哀れですね。

まあでも、女2人に敵うはずも無く…無謀と言えるでしょう（笑）

Gap 食い違ふ記憶

澪の新しい住居は、大きなマンションだった。私の家から、歩いて15分。割合に近い。

「私の部屋は、ここの10階だよ。」
「大きい……。」

唖然とする私に笑って、澪はオートロックのガラス扉を鍵で開けた。澪に続いて私も中に入る。

エレベータに乗り、10階まで上がる。「青柳」と書かれたプレートがかかっているのは、一番奥の角部屋。

「ただいまー。」

澪が声を掛けると、奥から澪と同じ明るい茶髪の、エプロンを付けた女性が現れた。私の覚えている顔と、ほとんど変わらない。

「お帰りなさい、澪。遅かったわね。」

相変わらず若いなあと私が驚いていると、女性……つまり、澪の母親が口を開いた。

「うん、？に会ってね、久しぶりに家に遊びに行っていたから。」
「連絡くらい入れなさいよ。」

「メールしたけど？」

「え？…あら、本当。マナーにしていたから、気付かなかった。」

…相変わらず、ちょっと抜けている。

「あら？えっと、その子は……。」

その時、おばさんが私に気付いた。さて、どうなることやら。

「？、だよ。」

澪がいたずらっぽく笑いながら、はっきりと言った。きっと、自分と同じように驚く事を期待しているのだろう。

……けれど。

「ああ、そんな暗い所にいるから気付かなかったわ。久しぶり、君。去年年賀状で見たから分かっていたはずだったんだけど、やっぱり大きくなったわねえ。」

おばさんは、そう言うてにつこり笑った。そこに不自然さは、ない。

「……………え？」

漣が呆然と目を見開いた。

「お久しぶりです、おばさん。すみません、漣をこんな遅い時間まで引き止めてしまつて…」

漣が何か言う前に、私はそう言つて丁寧に頭を下げた。

「あら、良いのよそんな事。8年ぶりだもの、話す事、いっぱいあるはずだもの。少し上がっていかない？お父さんもいるのよ。」

「いえ、悪いですし…」

「遠慮なんてしないでいいわよ。さあ、上がつて。何をしているの？漣。貴方が上がらないと、？君が入れないわよ？」

屈託なく笑つてそう言う母親を、漣は混乱した顔で見上げた。そのまま口を開こうとするので、ブレザの裾を軽く引いた。

漣が振り返る。目で促した。漣は、泣きそうな顔をした後、向き直り、黙つて靴を脱いだ。

廊下を歩き、突き当たりのドアを開くと、広々としたリビングが目に入った。シンプルな家具が、無駄無く配置されている。センスのいい部屋だった。

ソファを薦められ、紅茶をだされた。お礼を言つてから、一口する。

漣は私の隣で、口を開いては閉じ、俯いてはまた顔を上げ、を繰り返していた。両手がきつく握られている。

足音がして、廊下が続くドアが開いた。中年の、しかし、若々しさの残る男性が入ってきた。

細身ながら、運動をしていると一目で分かる体格。その年代の人に珍しい細面は、知的な雰囲気を感じさせる。口元が漑に似ていた。

「久しぶりだな、？君。随分と大きくなった。」

そう言つて、男性…漑の父親が微笑んだ。立ち上がり、頭を軽く下げる。

「お久しぶりです、おじさん。お変わり無さそうで、何よりです。」

「…本当に、立派になったな。時の流れるのは早いものだ。」

私達の会話を、漑は泣きそうな顔で見っていた。

紅茶をだしてから奥に下がっていたおばさんが戻ってきた。手にはアルバムと、はがきを持っている。

「漑が今朝、？君に会うかもしれないって言ったのを聞いて、何だか懐かしくなっちゃって、押し入れから出してきたの。？君も、見る？」

「ええ、是非。」

おばさんに会つてすぐに浮かんた予測を確認する為にも、頷いた。

アルバムを開く。幼稚園の写真だった。漑と私が、砂遊びをしている。2人の来ている服に、何となく見覚えが会った。

ページをめくる。卒園式だ。2人ともおめかしさせられ、精一杯
気取った笑顔で家族と共に写っている。

更にページをめくる。小学校入学式、夏休み、プール…。曖昧な
記憶の中に残る思い出が、鮮明に正確に切り出されている。

ただ1つ、私が男の子である事だけを除いて。

涙が息を呑む音が聞こえた。私は年賀状に手を伸ばす。

家の前で、家族全員が写っている写真だった。セルフシャツで
撮った写真。メカ音痴の両親に変わって私がセットした。

その写真もまた、今の私が少し幼く写っている。

「毎年、年賀状を送ってもらっていたけれど、やっぱり写真と実物は
違うわね。？君、本当に大きくなって。さっき見たとき、一瞬本当に
誰だか分からなかったわ。」

その後、おばさんとおじさんがいくつかの昔話をした。相槌を打
ったり、一緒に笑ったりしながら、私はある事に気付いていた。

2人は、私が「女」であるとか分かる手掛かりとなる記憶を、一切
失っている。変えられる事の無いまま、つなぎ合わされた記憶は、

見事に私の性別を曖昧にしていた。

クラスメイト達よりも記憶に干渉する割合が小さい理由は、随分会っていないかった事、私達が小さかった事につきるだろう。

漣は両親と私が話している間、ずっと俯いて何も言わなかった。隣で座っている私に、小さな震えが伝わって来る。

「それにしても？君、昔から顔立ちの整った子だと思っていたけれど、本当に男前になって。漣も惹かれたんじゃない？」

おばさんがいたずらっぽく笑って言った。恋愛に繋がるのではとからかう、他愛も無い娘とのコミュニケーション。普通なら、笑って、あるいは、ちょっと慌てて否定する場面だ。

でもそれは、漣には我慢できる事じゃなかった。

「どうしてなの！？どういう事なの？意味分からないよ！何でお父さんお母さん、そんな当たり前みたいに……！」

突然叫ぶ漣に、両親がぎょっとした顔をした。

「漣、落ち着いて。」

手を肩に置いたけれど、漣はそれを激しく払いのけた。

「？も？だよ！何でそんな平気な顔しているの？どうして笑ってい

られるの？」

「漣、一体……」

おばさんがおそろおそろ声を掛けるも、漣は聞こえていないようだ。

「こんなの、おかしいよ！私は絶対認めない！！」

漣はそう言ってリビングを飛び出した。

「漣！」

慌ててソファから立ち上がった。そのまま漣を追いかけようとして、おじさんに引き止められた。

「待ちなさい。？君、君は何を隠している？」

おじさんの顔は、厳しく引き締まっていた。

「漣は、ちょっとした事で取り乱すような子ではない。その漣が怒鳴るなんて、何があった？」

「…説明は、少し待って下さい。今は漣と話があります。」

漣がしようとしている事は、大体想像がついた。それは4ヶ月前、私がした事と同じ。…私の過去を、探すこと。

「玄関を開ける音は聞こえなかった。おそらく澪は、部屋にいるはずだ。？君はもう高校生。異性の部屋に入る気かね？」

おじさんの目が、私を射抜いた。おばさんが、動揺を隠しきれない表情で、しかしおじさんと同じような目をして私を見た。…あの時、私の両親が見せたのと、同じ目。

「澪は気にしません。僕もです。そういう関係になる気は一切無いし、なるはずありません。たとえ僕が入ったとしても、澪は気にしない。それに、ここは僕が行かなければならないんです。」

おじさんの目を真っ直ぐ見ていった。優しい目で私と遊んでくれた彼は、私によく言った。

『人と大切なお話をする時にはね、相手の目を見て話さない。目も見れない人の言う事は、信じちゃ駄目だ。人の思いは、目に映るものだよ。』

だから私は、詳しく告げないまま、信じてもらう為に、絶対に目を逸らさずに訴えた。

おじさんは、しばらく私を見つめた後、頷いた。

「分かった。君を…信じよう。」

「ありがとうございます。」

一礼して、素早く身を翻した。

A p o l o g y 謝罪と決意（前書き）

更新が遅くなりました…
今回ちょっとシリアスですね。

Apology 謝罪と決意

廊下に出る。少し右に進んだ所にあるドアが少し開いていた。そこから、何かを探すような物音が聞こえた。

ドアを軽くノックする。返事はない。構わず中に入った。

女の子らしい部屋だった。零の性格そのままの、優しい雰囲気醸し出している。

零は部屋の奥にある箆笥を無言で漁っていた。私が入ったのに気付いているはずなのに、振り向きもしない。

「……あつた!」

ようやく目当てのものが見つかったらしい。小さな箱を手に持って振り返った。

「これ、？からの手紙を入れてたの。何度か写真を送ってくれたでしょ？だから……」

箱を開けていた零の言葉が、途中で止まった。無言で、箱を覗き込む。

箱には、手紙が一通も入っていなかった。男の子が写った写真が、

2、3枚入っている。

男の子…つまり、「^{わたし}?君」だ。

「……………どうして……………?」

漣が呆然と呟いた。

「漣。……………ごめん。」

私は、漣に謝った。漣が呆然とした顔のまま、私を見上げた。

「私の家の写真も、全部こうなってた。じいちゃんやばあちゃんちのも。漣の家ももしかしたらって思ってたんだけど…言えなかった。」

ほんの少しの可能性に賭けてみたくて。漣が覚えていたから、漣の見た年賀状は、「私」が写っていたから、ひよっとしたらと思うて。

漣に、それを伝える事を、意図的に忘れてしまった。

「…漣。最後に年賀状やアルバム、手紙を見たのは、いつ?今朝私の事を話すとき、私の性別について、話題に出た?」

漣が目を見開いた。しばしの沈黙の後、ゆっくりと口を開いた。

「……年賀状も手紙も、届いた時に見たつきり。アルバムの写真も、ずっと見てなかった。今朝は、……久しぶりに会う、大きくなっただろうね、びっくりした顔を見るのが、話すのが、楽しみつて……それだけ。」

頷いてみせた。

「……多分写真は、4ヶ月前に変わった。手紙が無くなったのも、同じだと思う。あれがあつたら私の事、分かっちゃうもんね。私の家も、文集とかは、ほとんど無くなってた。残ってるのは、敬語で書かれた無難なものばかり。将来の夢、とかね。」

「……どうして？」

澪がもう一度呟いた。

「分からない。けれど、これだけは言える。……澪のお母さんとお父さんは、私の事、男だと思ってる。」

「だから、どうして!？」

澪が叫んだ。その目は、涙で濡れて光っている。指先でそっと拭いた。

「……クラスメイト達と一緒にだよ。始めは、遠くにいたから覚えていたのかと思った。澪の家は、じいちゃん達よりも遠かったから。けど、違つたみたい。」

「……?、ごめんなさい。」

澪の目から、また涙があふれた。その小さな体を、抱きしめた。

「澪が謝る事じゃない。謝るのは私の方だよ。……澪に、私と同じ思

いをさせちゃった。」

自分と他人が、違う記憶を持つ。あらゆるものが、自分が間違っていると感じて来る。それがどれだけ不安になる事か、分かっていたのに。漑に、よりによって両親との記憶のずれを体験させてしまった。その可能性を知っていたのに、言わなかった。言えば、少しは心の準備ができたのに。

「ごめんね、漑。…巻き込んだじゃって。」

ようやく気付いた。漑を孤立させてしまった事に。漑はこれから3年間、私の事を伏せたまま、隠し事を抱えて過ごさざるを得ない。知らなければ、ただ笑って、幼馴染との再開を喜べたのに。新しい友達に囲まれ、時に私と昔話をしながら、何も気にする事無く関わっていられたのに。周りとの記憶違いに不安になる事も、私に気を使う事も、しなくてすんだのに。何の因果か、漑は、私を覚えていた。

そんな事にも気付かず、覚えていてくれたと喜んでいた。味方が出来たと安心して、甘えていた。そして、…漑を、傷つけた。

「漑、本当にごめんなさい。」

漑が首を振った。言葉は、涙で出て来ない。

私の腕にすっぽり収まる、泣き止む様子の無い漑を抱きしめながら、私は覚悟を決めた。

漑は私の味方だと言ってくれた。だから私も、漑を守る。漑の為なら、何でもする。…たとえそれが、リスクの大きな賭けだとしても、私は。

……漑の両親に、全てを話そう。

A p o l o g y 謝罪と決意（後書き）

？真面目ですよね。

この2人は、本当に友達想いです。

Persuasion 理解と新たな仮説（前書き）

さて、？は上手く事情を理解してもらえる事は出来るのでしょうか。

Persuasion 理解と新たな仮説

泣き止んだ漑を連れて、私は部屋に戻った。私がこれから取る行動については、漑に話してある。最初は反対されたけど、やがて頷いてくれた。

リビングに戻ると、おじさん達はソファに座ったままだった。黙って、私と漑を見比べている。

「お父さん、お母さん。いきなり取り乱して、ごめんなさい。」
漑がまず、先程の事を謝った。
「構わないわよ。大丈夫？」
「うん。」

母親が笑みを作って優しく言った。父親は、何も言わない。黙って私に説明を促した。

「そう言えば、後でするって言ってたっけ。」

ゆっくりと深呼吸をした。流石に緊張していた。

「お父さん、お母さん。話が、あります。」

「まず、座りなさい。それからだ。」

おじさんが、静かにそう言った。頷いて、漑と並んで座る。

「それで？話とは、何だ。先程の事と、関係があるのか？」

「はい。」

そこで、もう一度深呼吸をした。さあ、ここからは賭けだ。

「『私』は、去年の冬、男になりました。」

そこからは一気に説明した。漣に話した内容を、より簡潔に、分かりやすく。分からない事、分かっている事、洗いざらい告白した。

話の間、おじさんは一言も口をきかなかった。おばさんが何度か口を開いたけれど、おじさんがそれを止めた。

時間にして約5分。リビングに、私の声だけが響いていた。

「…何故か、漣は私の事を覚えていました。他に覚えているのは両親と弟だけです。私も未だに信じられない話ですが、事実です。」
「お父さん、これは私も保証する。私の記憶では、？は確かに女の子だった。弟の裕真君も、姉ちゃんって言ってた。だから……」

私が話を締めくくった後に続いた、漣の必死の説得を、おじさんは片手で制した。そのまま目を閉じ、何事か考え込む。重苦しい沈黙がしばらく続いた。

永遠とも思われる時間の後、おじさんは目を開き、私を見据えた。

「…本来なら、君の事を両親に話し、病院を紹介するのが常識的な判断だろう。いや、家族ごと医師に見てもらえるよう、漣を連れて相談するべきかもしれない。」

「もつともな判断でしょう。私でもそう考えます。」

正直な話、よく両親が私の言う事を信じたものだ、今でも思っている。

「だが、だ。どう見ても君はまともだ。そして、話も、突拍子も無いなながらも、筋が通っている。…何より、私は漣を信じている。そして、先程私に漣のもとに行かせるよう願った、そして、今私を見ている君の目は、嘘をついているものの目ではない。……信じがたいが、どうやら事実のようだ。」

そう言って、おじさんは溜息をついた。

「言われてみれば、君に関する記憶に、性別に関わるものは一切残っていない。写真が無ければ、どちらかは分からない。」

「でも、写真は どうして？」

おばさんは、未だ半信半疑の顔で言った。

「分かりません。私も、あれはずっと不思議でした。……ただ。」

少し迷って、私は制服のポケットからあるものを取り出した。

「大掃除の時に、弟の部屋から出てきました。数年前に、私への嫌

がらせて隠したまま、忘れていたそうです。」

小さな写真立てだ。写真を入れるべき場所に、幼い字が並んでいる。

『わたしたちがずっとしんゆうであることを、ここにちかいます。あきら、だいすきだよ。わたしのこと、わすれないでね。みお』

漑達親子は、それを食い入るように見つめていた。

「引越す前に、漑がくれたものです。そこには「わたしたち」とあります。私が女であった証拠が何もかも無くなってしまった中、存在しないものと見なされていたせいかな、これだけは残りました。随分と曖昧な証拠ですが。」

隠したまま忘れていたという事実には思いっきり怒ったけれど、同時に凄く嬉しかった。私の記憶が正しかったことが、証明された気がした。

「信じてもらおうにも、お二人が覚えていませんから、難しいのは分かっています。でも私は、漑が覚えている限り、お二人にそれを知ってもらいたい。漑にはこれから、随分大きな隠し事をして学校に通ってもらうことになってしまいました。ですから、せめて家中だけでも、言葉を選ぶこと無く、私の事を話して欲しいんです。」

私のせいで澪は余計な苦勞を背負うことになる。だから、その荷物を少しでも軽くするのは、私の義務だ。

「…最後に1つだけ。君が、つまり、女の上宮？が、何らかの事情で、その体に憑依したということは、ありえないのかね？」

「……その手がありましたか。」

とりあえず私の中身が女だということは理解してもらえたらしい。そう分かっただけに、返答は感嘆となってしまった。

確かにそれなら、癖が残ってもおかしくない。記憶の修正も写真も、私が元からこの姿だという事にする為と考えれば、筋は通る。

「ですが、それならどこかに体があるはずです。新聞に、そういう話はありません。同い年の少年が失踪したという話も、聞いたことがあります。」

「入れ替わって、どこかで君と同じような事をしている子がいるかもしれない。」

「成程……」

それならあり得る。というか、それなら私も元に戻る可能性があるし、体が女から男に変わるなんてちょっと怖い（あ、いや、医療はそうは思わないけど。手術の跡とか、無いからね…）事態を否

定
で
き
る。
。

P e r s u a s i o n 理解と新たな仮説（後書き）

憑依疑惑発生です。さて、真相はいかに（笑）

Proof 解決とお遊び

いつそその説を採用して、挙動不審の女の子を捜そうかと思った時、漑に肩を叩かれた。

「？、悪いけど、それは無いから。」

…「悪いけど」って……、今漑、私の心読んだ？

「実は私、さつき？の家で気付いちやっただよねー。」

いや、それよりも今は漑の発言の方が最優先。

「気付いたって、何に？」

「？、服脱いで。」

「はあっ？」

何を突然言いだすのだ、この娘は。

「口で説明するより見せた方が早いもん。ほら、早く脱いで！」

そう言っただけが、無理矢理私のブレザを脱がせ始めた。何故か両親も、それを止めない。

「わ、分かったから。」

慌てて漑の手から逃れ、自分でブレザを脱ぐ。

「シャツも。上、裸になって。」

「な、人前で…」

「？、忘れてない？清条高校って、男子は運動会の組体操で、上半身裸だよ。水泳もあるだろうし、これくらいで恥ずかしがって、どうするの？」

その言葉に、愕然とした。

そうだった。男子が上を脱ぐのってそれほど珍しくないし、女子もそれが割と当たり前になっている。

忘れていた、というよりも目を逸らしていた事実、今更ながら本気でどうしようかと思った。

何この女子として終わった状況、と思いながら、泣く泣くシャツまで脱いだ。

「…やっぱりね。見て、お父さん、お母さん。」

そう言っただけは、私の背中をおじさん達に見せた。

「あ、これって…。」

まず声を上げたのは、おばさんだった。

「…そうか、忘れていたな。となると…………。」

「一番の証拠だね。」

驚いたような声のおじさんに、澪が満足げな声を上げた。

「えーっと、澪？説明してもらっていいかな？」

後ろで勝手に納得されても困る。私としては、憑依説を採用したいのだから。

「うーん、自分じゃ見えないね…。？、幼稚園の頃に怪我したの、覚えてない？」

「……あ。」

そう言えばあったね、そんな事…。

幼稚園の…確か年中か、私達はおばさんに連れられて、いつもやりちよつと遠い公園まで遊びにいった。そこには変わった遊具がたくさんあって、かなりはしゃいで遊んでいたのだ。

遊具のひとつ、ぐるぐる回る丸いジャングルジム（？）で遊んでいたら、澪がバランスを崩した。結構高い所まで上っていた澪は、頭から落ちそうになった。それを私が受け止めたのだ。

ジャングルジム（？）を蹴って澪に飛びつき、そのままジャングルジム（？）に片手で捕まり、澪を抱き込むようにしてそのまま両方の手でしがみついた。今思えば、よくまあ、あんな真似が出来たものだ。今なら、まず怖くてできない。

で、澪は落ちずに済んだんだけど、回っていたジャングルジム（？）とその支柱との間に、サンドイッチにされてしまったのだ、私達は。澪は私の腕の中にいたから無事だったけど、私は背中がネジ…だったかな？とにかく突起物によって、ざっくり切れたのだ。確か、5針程縫ったはずだ。

怪我した私を見た澪が大泣きしてたのと、おばさんが大慌てだったのを今でも良く覚えている。

「その時の後が、今？の背中にある。」

「…あー、まだ残ってたんだ。」

自分じゃそもそも見えやしないから、残っていた事すら初めて知った。

そのとき、カシャっていう音が後ろから聞こえた。ん？今の音って…

「ほら、見る？」

そう言っておばさんが携帯の画面を見せてきた。覗き込むと、確かに斜め一文字に白い跡が残っている。

「って、何で保存しようとしているんですか、おばさん。」

そのまま保存のボタンを押そうとするおばさんのてから携帯をひたたくり、消去した。

「あー、消しちゃった。若い男の子の背中って良いなと思ったのに…。」

「…何を考えているんですか……。」

流石は澪の母親というか、中身が女と分かった途端におもちやにしようとした。全く、母娘揃って…。

手早くシャツを着て、ブレザを羽織る。確認は終わったのだ、なるべく早く服を着たかった。

「…しかし澪、どうしてこれに気付いた？服を脱がないと分からないはずだが、「さつき？の家で」って……。」

「…あ。」

まずい。

多分漑は、私が泣いている時に見たのだろう。あの姿勢なら、シヤツとの間から怪我の場所までは見えるから。

けど、今の私は「男」。そもそもあの体勢、端から見たらかなりヤバい、というか、思いつきり誤解を推奨する。出来れば言いたくない（泣いたのを余り人に知られたくないしね）けど、おじさんの様子から言って、私が漑の前で上を脱いだのではと、とんでもない勘違いしてる。

どう説明しようかと頭を巡らせる、前に、漑が笑ってあっさりと答えた。

「うっん、脱がなくても見えたの。こうしたから。」

そう言っ漑は立ち上がって、さっきの姿勢を忠実に再現してみた。

「み、漑！」

「…？君、久しぶりの再開なのにやるわねえ。漑は中学時代、言い寄る男の子を片っ端から断ってたのに。」

「や、ちよつと待って下さい！私にそういう性癖はありません！」

何かずれた感想を述べるおばさんに、慌てて大声で否定した。漑はまだ私を解放しない。

「そうだよお母さん。流石の私も、？を異性としては見れないよ？まあ、こんな風に男の子を抱きしめるなんて貴重な体験だけど。？、顔良いし、最高。」

「あら、それもそうねえ。しかも恥ずかしがらなくて済むしね。漣、変わってくれる？」

「ちょ、何を言ってるんですか！漣も離して！」

「えー、もうちょっと…」

「漣！」

「うー、？のケチ。」

漣がようやく私から離れた。どうして恥ずかしくないんだろうね、全く。

「…？君、ちょっと。」

今まで黙っていたおじさんが、妙に真剣な声で私を手招きした。首を傾げつつ近づいて耳を貸すと、とんでもない言葉が飛び込んできた。

「漣に手を出したらただじゃ済まないからな？」

「…いや、おじさん？今までの話聞いてました？私、女なんですけど。」

おじさんが壊れた。ホント、そういう趣味は無いつてば。

「…それもそうだな。ならば、漣に手を出す不届きものから守ってやってくれ。君がいたら安心だ。何なら、付き合ってるという事になれば良い。」

…おじさん……。

「…残念ですが、私も一応女だったんで。零に好きな人が出来たら、全力で応援します。邪魔なんてもつてのほかですよ。」

娘を心配する父親の味方になる女の子なんて、いる訳が無い。

きっぱり言い切ると、実に残念そうな顔をするおじさん。あんまりそういう事やってると、嫌われますよ…。

「…さて、そろそろ帰ります。これ以上はお邪魔ですし、弟が飢えかかっていると思うんで。」

成長期前らしく、最近裕真はとにかく良く食べる。料理音痴だから自分で作れないし、母さんはまだ帰って来ない。いい加減、死にかかっている事だろう。今日の意趣返しと言えなくもないが、流石にそれは可哀想だ。

…しかし、裕真が本当に成長期を迎えたらどうしよう。父さんも母さんも結構背が高いし、私も女子にしては背が高い方だったから、裕真もそれなりには伸びるだろう。私は成長が止まっているから、第三者から見ると随分身長差のある「兄弟」に……

実に嫌な想像である。しかも、近いうちに実現しそうな。

「ああ、そうね。もう遅いし。ごめんなさい、随分引き止めちゃって。」

こちらの懸念を他所に、おばさんが謝ってきた。

「いえ、こちらの都合ですから。遅くまですみませんでした。」

実際、遅くなったのはこんなとんでもない事情を説明しなければならなかった私のせいだ。私が謝られるのは筋違い。

「いいえ、ありがとう、大切な話をしてくれて。怖かったですよね？」

そう言っておばさんは優しく笑ってくれた。私の部屋で澪が浮かべていたのとよく似た、全てを分かった上で自然と浮かべられた笑顔。

参ったなあと思いつつ、曖昧な笑みで答えをごまかして、私はリビングを後にした。

そのまま帰ろうとすると、澪が呼び止めてきた。

「？。……ありがとう。」

その顔には、先程までの暗さが無くなっていた。ほっとして笑う。

「お礼を言うのはこっちの方だからね。少しでも澪に返せたのなら、良かった。…じゃあ、また明日学校で。」

「うん。また明日。」

澪の最高の笑顔に私も今日一番の笑顔を浮かべて、私達は手を振って別れた。

P r o o f 解決とお遊び（後書き）

すみません、後半がちょっと…ですよね。
でも、？は本当に遊びがいがあるんです（笑）

先程とんでもないミスを犯していた事に気づき、慌てて訂正。
この次のページにあったものは…見なかった事にして下さい。
ホントすみません…

Negotiation 食卓にて

家に帰ると、裕真の恨めしげな声が聞こえてきた。

「兄ちゃん、遅い…。俺死にそう。」

「自分で作れるようになれよ…。」

溜息をついてから、キッチンに向かう。ついでに壁時計を見ると、8時。まあ確かに、お腹が空くだろう。

冷蔵庫の中をあさって、中身を確認。出来るだけ早く作れる料理を自分のレシピブックから検索、手早く調理に取りかかった。出来るまでに掛かった時間は、15分。まあ、上出来だろう。

裕真もご飯位は炊けるので、既に保温状態になっている。これを先に食べておけば良かったんじゃないの？という疑問は横においておく。

「はい、どうぞ。」

「ああ、やっと食える…。いただきまーす！」

食べながら、澁の家であった事を簡単に説明した。勿論、おもちゃにされた事は秘密だ。

「…変なのー。青柳さん…だっけ、は覚えてんのに、その親は覚え

てない？何それ？」

嬉しそうにご飯をかつ込みながら、裕真がいぶかしげな声を上げた。

「漣が得別なんだろ。よく分からないけど。」

きちんと口の中のを飲み込んでから、答える。全く、姉弟なのに、どうしてこうもマナーに違いが出るものか。

「確かに、どうして青柳さんは覚えてんだろうね。…って、それを言うなら俺や父さん、母さんもか。」

「…そうだな。」

それは私も、帰宅途中に考えた。どうして裕真や両親は、私の事を覚えていたのだろうか。

「…ごめん。」

「は？」

突然謝る裕真に、思わず間の抜けた声を上げる。

確かに入学式の件では怒ったけれど、それはもう謝られたし。部屋に上がってきた件も、漣に叱られて（脅されて？）たし。このタイミングで謝られるような事をされた覚えはないのだけれど…

「いや、今日姉ちゃんが青柳さんと話しているのを見てさ、家でま
で言葉とか、無理させて悪かったかな、ってさ。覚えているの、俺
達だけなんだし。」

「……………」

「…それに、姉ちゃんも平気な顔してたけど、結構辛かったんだな、
って気付かされたから。姉ちゃんの置かれている立場、考えなかつ
た訳だから、悪かったなって……………」

「……………待った。」

聞き捨てならない事を口走った馬鹿うしかの言葉を止める。

「気付かされたって、どういう事かな、裕真。」

「え？だから、泣くの我慢していたなんて知らなかったからさ。今
日……………」

「…裕真。私は、部屋に近づくなって言っただよね？私達の会話、盗
み聞きしてた訳？」

ゆっくりと聞いた途端、裕真の顔に焦りが走った。

「い、いや、そうじゃなくてさっ。言われた通り掃除してたんだけ
ど、通りかかった時に俺の名前が耳に入って、そのっ、ちよっと気
になって……………」

「……………裕真君。」

「はいっ……………」

につこり笑ってみせると、裕真の顔が強張った。

「それ以降にあった事は、今直ぐ忘れてもらおうか。」

「あ、えっと……」

「君は男の子だから分かるよね？良い年してあの場面をやたらと言
いふらされたら、どう感じるかを。」

「えっと、その……」

「今後、その話が広まったりするようだったら、私は君への対応を
考え直さないといけない事になる。それは私も避けたいなあ。」

そう言ってもう一度笑顔を浮かべると、つられたように裕真が笑
みを浮かべた。かなり引きつっているように見えるのは、気のせい
だろう。

「どうするのかな？」

「えっと、その、ごめん姉ちゃん！俺、何も見てないし、聞いてな
いから！だから、姉ちゃんが泣……いや、今日の事は絶対人には言
わないから！」

早口で言い切った裕真に優しく笑いかけて、裕真の手から空にな
った茶碗を取り上げ、お変わりをよそってやった。

「よし、その言葉、信じてあげよう。自分の言った事には責任を持
とうね？」

「もちろんです！」

うん、物事は口で解決するのが一番だ。裕真の目が妙にきらきらしているのは、ご飯をよそってやった事に対する感謝だろう。

Negotiation 食卓にて（後書き）

裕真はいい子なんですが…詰めが甘かったですね。
？はあくまで「姉貴」なのですから。

Parents 上宮家の夜

「ただいまー。」

そのとき、落ち着いた女性の声が玄関から聞こえた。ちゃんと鍵はかけていたのだから、声の主は考えるまでも無い。…いやまあ、声で誰か位、分かるけどね。

「あ、母さん！お帰りなさい。」

「お帰り、母さん。」

「あら？随分遅い夕食ね。これならもう少し急いで帰れば良かったわ。ただいま、？、裕真。」

私達の母親、上宮香奈恵。小さな顔に丸みの帯びた頬、柔らかな光のこもった茶色い瞳。可愛い印象を抱かせる顔立ちだけど、どことなく知性が漂っている。

「母さん、夕飯まだ？」

「ええ。仕事終わって、直ぐ帰ってきたから。」

そんな答えが返ってきたので、更によそってラップを掛けておいた夕食をテーブルに移す。

「さっき作ったばかりだから、すぐ食べられるよ。」

「あら、ありがとう。ちよっと待ってね。」

嬉しそうな顔で頷いた後、母さんは一度奥にある部屋へ行って、荷物を起き、手を洗って戻ってきた。

その間に、ご飯をよそり、飲み物を用意し、直ぐに食べられる準備を整える。

「いただきます。」

行儀よく手を合わせてそう言うってから、母さんは食事に手をつけた。私の食事のマナーの良さは、母親譲り。でも、母さん程綺麗に食べられないのが、ちよつと悔しい。

「相変わらず上手ね、？。おいしいわよ。」

「ありがとう。…そう言えば母さん、今日、澪に会った。」

食べ終わった私と裕真の分の食器を洗いつつ、裕真同様、今日一連の出来事について話す。裕真が約束を守るという事で、挨拶の件については伏せてやる事にした。

「あらあら、青柳さん、驚いたでしょうねえ。それにしても？、よく話す気になったわね。」

「…まあ、澪の為だから。」

信じてくれたおじさんの懐の深さに感謝、と言ったところだ。

「で、母さんも久しぶりに会いたいでしょ？父さんもだけど、空いてる日の確認して、私に教えて。澪に伝えておくから。」

「分かったわ。楽しみねえ。漣ちゃん、去年の年賀状を見た限り、凄く綺麗だったじゃない？」

そう言つて優しく笑う母さん、凄く嬉しそうだ。漣はよく家に遊びに来てたし、懐かしいのだろう。

「うん、びっくりする位可愛かった。美樹も何か興奮してたし。裕真もどきまぎしてた。」

「えっ！？いや、別に俺は…」

慌てた様子で否定する裕真。女2人相手にこの態度は、思つたつぼだ。

「あら裕真、小学校卒業して、随分ませたわね。3つ上に手を出そうなんて、やるじゃない。」

「手を出すって何！？母さん、違つて！そりゃ、可愛いとは思つただけさ…」

慌てて言い訳しようとしてどつぼにはまり始める裕真。すかさず母さんに続く。

「緊張してたよねー、裕真。まあ分かるよ。漣は同性から見てもものすごく可愛いから。明日からきつと大変だろうね。裕真、ぼんやりしていると、取られちゃうよ？」

「姉ちゃんまで何言つてんだよ！？だから、そういうのじゃなくて…」

「あら、漣ちゃんも大変ねえ。？、変なのからは守ってあげなさいよ？裕真の為にも。」

必死で否定しようとする裕真から私に注意を移して、母さんが私に向き直った。勿論、追及の手は緩めない。

「勿論。美樹にも協力させて、変な虫がつかないようにする。高校生にもなると、男は怖いからね。その点裕真はまだ安心。どうせ手も握れないだろうし。」

「ねえ2人とも！俺さつきから違うつて言ってるよね？無視？無視なの？それから姉ちゃん、というか兄ちゃん！兄ちゃんが守るつて、変じゃない？絶対誤解されるつて！」

顔を真っ赤にした裕真がムキになって私に食って掛かってきた。この逞しさは一体誰に似たのだろう。

「誤解？やだなあ。無理矢理濡に手を出そうつて奴に言つて聞かせるだけだよ。幼馴染なんだから、それ位は普通だつて。普段は美樹にガードしてもらうし。…まあ最初の方は、女子に囲まれている可能性は高いな。あの可愛さは、女子にとっても十分魅力的だし。」

ちなみに、言つて聞かせるという言葉には、「手段を選ばず」と言葉に表されない注釈付きだ。流石は家族というか、言わなくても通じたらしい。

「いやそれ、絶対普通じゃないと思う！」

「そんな事ないわよ、裕真。高校生にもなると、変な奴に狙われる事、少なくないんだから。？だつて、こんな偶然、活かさない手は無いわよね。女の子には守りきれないところで、濡ちゃんを守つてあげなさいな。」

裕真の反論は母さんに取り下げられる。

…それにしても、今更ではあるけれど、娘が息子になった事を「偶然」で済みますか……。

そう言えば母さん、一番最初に事態に適応してたな。まあ、女同士通じるものがあつたとはいえ、父さんが納得できたのは、母さんの貢献が大きいだろう。

…受け容れて最初に言つた言葉が、「ああこれで、着飾って遊ぶ事が出来ないじゃない。これからどんどん女らしくなるって、楽しみにしてたのに…」だったのは、どうかと思うけれど。

「うーん、空手を習っていて良かったとは思うけど…、体格差がなあ。」

「成長、去年の夏で止まっちゃったものねえ。男の子にしては小さいかしら。」

「間違いなくね。まあその辺は、今後の裕真に期待しようか。」
「だから、なんで俺！？いやそりゃあ、今から伸びるだろうけど…」

ちなみに、現在の私の身長が162？、裕真が159？。高1女子にしては大きめな身長と、（多分）中1男子の平均的な身長。

今日の夕食1つとっても、成長の終わった私はお茶碗1膳（と言っても男物サイズ。どういう訳か男になってから、少し食べる量が増えた。太る…）、育ち盛りの裕真は大盛り2膳。

…ああ、一年後が怖い……。

「まあそれはさておき、私はお風呂にでも入ろうかな。裕真、入れてあるよね？」

「…入れたよ。」

食器の片付けが終わったところで、裕真に聞くと、ちょっと拗ねたような声で返事が返ってきた。流石にからかいすぎたか。

「ありがと。じゃあ入って来る。母さんも仕事お疲れ。ゆっくりしてね。」

そう言って私は、着替えを取りに2階へと上がった。

私が風呂に入り、母さん、裕真の順で入った後、私は今日の日記を書いた。

これは4ヶ月前から始めた習慣だ。意味は…特には無い。けれど、ただ何となく、つけたくなった。

…まああれだ、要するに私は、「私」である事にまだ拘っている。「女」である事を忘れなくなつて、今の「私」を記録に残しているのだろう。多分。

今日はいろいろあったから、書きやすい。簡潔に書き上げてから時計を見ると、もう12時。そろそろ寝なければ。

その前に水でも飲むかと下に降りると、丁度父さんが帰ってきた。「父さん、お帰り。遅くまでお仕事お疲れ様。」

「ただいま、？。今日は入学式だったな。おめでとう。」
そう言って柔らかく笑う父さん。仕事の疲れを感じさせないのは、流石と言っべきか。

実を言うと、今の私は父さん似だ。というか、男になって始めて、ああ私は父さん似だったのかと気付いた。文句のつけようの無い、整った顔立ち。その癖の少ないさらさらの黒髪と共に、私とそっくり。私が母さんから受け継いだのは、あの茶色の瞳だけだ。

あ、裕真は母さん似。ちょっと童顔で、ふわっとした髪質。そしてどいう共通点だと言いたいけれど、目は父さんの真っ黒な瞳を受け継いでいる。

「ありがとう。」

「あら、おかえりなさい。」

リビングに出てきた母さんが、父さんに気付いた。寝間着姿だから、私と同じく水でも飲みに来たのだろう。

「ただいま。」

「あ、父さん。次の休み、何時？実は澪が帰ってきたんだ。会いたいでしょ？」

ふと思い出して、父さんの予定を聞く。父さんは懐かしそうに答えた。

「へえ、澪ちゃん戻ってきたのか。そうだな、週末は空いてるぞ。」
「あら、丁度私も空いてるわね。…？、もう説明するのも面倒でしょうし、私が話すわ。もう寝なさい？明日も学校あるでしょう？」

母さんの言葉に有り難く甘える事にする。今日は話してばかりで、いい加減疲れた。

「ん、分かった。ありがとう。じゃあ、お休みなさい。」

「お休みなさい。」

「お休み。」

挨拶を交わして、明日からの学校生活に思いを馳せながら、私は部屋に戻った。

P a r e n t s 上宮家の夜（後書き）

ストックに危機が近付いて来ました…

今週忙しいんで、ちよつとヤバいかもしれません。

どのみち来週からは、このペースでは無理でしょう。
すみません…

O r i e n t a t i o n 学校行事（前書き）

高校入って最初の方って、説明が多いですよね。
ドキドキしながらそれを聞いて…懐かしいです（笑）

次の日、昨日と同じように大通りに向かって歩いてみると、途中で漣に会った。

「おはよう、？。」

「おはよう、漣。」

笑顔と共に挨拶を交わして、私達是一緒に歩き出した。

「今日は、オリエンティションだって言ってたな。何があるんだろ。」

「うーん、行事案内とか、部活動紹介じゃない？ほら、今日から勧誘が始まるんでしょ？」

「…ああ、そうだったな。」

昨日の会話を思い出す。私が空手部に捕まるのはどうやら決定事項らしい。

全国大会に何とか出れたのは認める。でも、それは女子として、だ。男子空手部に入ったところで、大した実力を発揮できるとはとも思えない。

もしそうなれば、怪しまれる事は确实。まあ誰も覚えていないからばれる事は無いけれど、妙な目で見られるのも嫌だ。

「…何とかなるよ、多分。頑張れ、？。」

私の表情から大体の事を察したらしい漑が、苦笑を浮かべてそう言ってきた。

苦笑いを浮かべる事しか出来ず、私は漑とともに校門をくぐった。

『ただいまから、オリエンテーションを始めます。』

相沢先輩によるアナウンスが入り、ざわついていた1年生が口を閉じた。

講堂に集められた私達は、妙に座り心地の良い椅子に座っている。クラスの指定の場所であれば並びは自由という事で、左から飯島、安藤、私、漑、美樹で並びの席を陣取っていた。

『まず、皆さん、入学おめでとございます。私は、清条高校の生徒会長を務めている、相沢望と言います。今日の前半の説明は私が担当します。』

それではまずは、こちらのDVDを見て下さい。清条高校の主な行事についてのまとめとなっています。』

相沢先輩の言葉と同時に、講堂の明かりが落ちた。急に暗くなった事で少しざわめきが起ったが、同時にスクリーンに映像が映し出された為、直ぐに収まった。

清条高校のスケジュールをまとめると。

4月 入学式、新入生と在校生の対面式

5月 1年生の自然教室

7月 文化祭
9月 体育祭
12月 マラソン大会
1月 3年生の応援
2月 球技大会
3月 卒業式

…行事多いなー。

3学期制を取る清条高校は、6月頭、7月末、10月頭、12月末、2月末に定期試験がある。何気に行事と被っているのは気のせいかなあ…

『他にも、外部模試や講演会、校内実力模試があり、充実した1年間になっています。』

充実というよりは、怒濤の1年間と言つべき日程になっている。これで部活したら、ホントに忙しそう…。ちよつと不安に思っていると、相沢先輩が笑顔で続けた。

『忙しくて大変、と思う生徒も少なく無いと思いますが、大丈夫です。清条高校は縦の繋がりが強く、先輩達が気軽に勉強を教えてください。部活に入れば、様々なアドバイスも貰えるでしょう。ですから、不安に思う必要はありません。』

先輩に勉強を教わる。中学の頃には無い発想だ。でも、凄く良い

事だと思う。

以前何かで、「勉強というのは誰かに教える事で自分もきちんと理解できているかを図る物差しとなる」と書いてあったのを読んだ覚えがある。後輩に教える習慣があるというのは、そこから考えると理想的ということになる。

流石、超進学校と呼ばれるだけの事はあるんだなあ。

『それでは次に、生徒会活動について説明したいと思います。』

テンパった時の様子が嘘のように落ち着き払った相沢先輩の説明を聞きながら、私はこの高校に密かに感心していた。

生徒会活動―主に生徒総会や選挙のシステムについて―の説明が終わった時、昼休みの始まりを告げるチャイムが鳴り、一時解散となった。

「上宮、昼はどうすんの？」

講堂から教室へと移動する途中、飯島に声を掛けられた。

「俺は弁当。」

「お、同じだ。一緒に食おうぜ。」

「それなら、僕も。」

「ああ、構わない。」

飯島と安藤の申し出に、少し意外に思いながら頷いた。こういう時に誰かと一緒に食べたがるのは、女子だけだと思っていた。

「えー、じゃあ私もー！」

「あ、それなら私も。」

それを聞きつけた美樹と澪が口を挟んだ事により、私達は5人で昼を食べる事になった。

Lunch Time 友人の事情

教室の机を合わせて、各々が弁当を取り出す。

美樹の弁当は、女子にしてはやや大きめの二段弁当、澪は普通サイズの一段弁当。飯島は大きな二段弁当。ここまでは予想通りだった。

意外だったのは、安藤が、飯塚に負けず劣らずの大きな弁当箱を取り出した事。

「意外！。安藤君、食べるんだね！。」

私と同じ感想を抱いた美樹の言葉に、安藤がちょっと恥ずかしそうに頷いた。

「うん、お腹空くから...。」

「つーか、高校生男子ならこれくらい普通だぞ？俺の兄貴なんか、俺の倍は食う。」

肩をすくめて、飯島がそう言うのを聞いて、驚いた。どんな胃袋してるんだろ...。

「.....ちよつと待て。」

飯島が、私の手元に目を留めていった。気付いたか。

「...おい上宮、お前まさかとは思うが、昼それだけか？」
「そうだけど？」

私の弁当箱は、美樹と同じ位のサイズ。12月から食事が増えたため、美樹よりもご飯が大目に詰めてある。私的には、太りそうで怖くて怖くて仕方が無い。

「上宮君、それ少ないよ…。」

けれど、安藤にそう言われてしまった。飯島も視線で同じ事を訴えて来る。

「だってなあ…。これで夕食まで持つんだよ。これ以上食べる必要も無いじゃないか。」

「お前…。そんなんだから、背が伸びないんだぞ。」

飯島に今一番気にしていることをはつきり言われて、黙り込む。今までずっと背の順でも後ろから5番目より前になった事は無かったし、ちびって言われた事なんて無かったから、尚更ダメージが大きい。

「まあ、良いんじゃない???がそれで足りるなら。」

澪のフォローに、目で感謝を伝えたところ、無言の訴えが返ってきた。

…そっか、澪も平均よりかなり小さいよね。この話、嫌なのか。

「そう言えば、この後は部活動紹介だよな。清条高校って、どれ位部活あるんだっけ?」

零のリクエストに応えて話題を変えた。一瞬にやっとした後、飯島が答えてくれた。おのれ…

「運動部は何でもござれ、だ。杖道部まであったと知った時には驚いたぜ。文化部も、かなり数が多い。勧誘が熾烈になるのも無理も無いな。」

「フエンスング部まであったもんねー。大学のサークルよりも種類が多いかも。」

美樹が頷く。

「美樹はバレーか弓道って言ってたね。」

零の言葉に、飯島が目を見張った。

「弓道？やめとけ、それだけはやめとけ。」

「何でー？」

美樹が不満げな顔になった。まあ、無理も無いだろう。

「部長が俺の兄貴なんだが、あそこは厳しいぜ？土日毎週あるし、上下関係もうるさい。軽い気持ちで入ると、絶対後悔する。」

その言葉に、美樹が苦笑を浮かべた。

「んー。男の子には分らないか。女子バレー部ってね、そんなもんじゃないんだよ。レギュラー争いが絡むから、もうどろどろ。生意気な後輩にはコートにも入らせないしねー。私、ああいうのもう嫌でさ。どうせなら、男女一緒に出来る部活に入りたくて。そうすれば、少なくともどろどろしたものにはならないからさ。」

その話は、以前から聞いていた。空手部は比較的さっぱりした性

格の子ばかりが集まっていたからそういう事は無かったけれど、レギュラー争いの絡む部活は、大抵いじめや派閥争いの温床。女の争いは、ホント怖い。

「ふーん。まあ兄貴の話を聞いてる限りじゃ、そういうのは無さそうだな。でも、厳しいぜ？」

「いーの。厳しい位の方が楽しーんだって。友達優先のぐだぐだな部活なんて、やりがいが無いもん。」

迷いなく頷く美樹に、1つだけ言った。

「そうだろうな。でも、ここはみんな頭良いし、そこまできじめは多くないんじゃないのか？それに、弓道以外にもそういう場所はあるだろうし。バレーもそうかもしれないぞ？」

「だといいねー。ま、回れば分かる話だから。」

「そうだな。」

美樹の言葉に頷く。確かに、そういうのは雰囲気で分かる。こう、何となく息苦しい感じがあるのだ、話している時に。何度か経験はあった。

「…妙に詳しいな、上宮。」

飯島の言葉に、内心ドキツとした。顔に出さずに、肩をすくめる。

「母さんの昔話によく付き合わされるからな。」

「あー、分かるわ、それ。俺んちは兄貴が聞き役。」

納得したように頷く飯島を、密かに羨ましく思った。事実、母さんの昔話は聞き飽きた。

L u n c h T i m e 友人の事情（後書き）

？は本気でちび扱いされるのが嫌な様子。凄く拘ってます。

Cross 小さな衝突（前書き）

新キャラ登場です。

Cross 小さな衝突

「？君はどうすんのー？空手部の勧誘、受けるの？」

「どうしようかな…」

正直、断りたい。けれど、飯塚の話聞く限りでは、断るのは大変そうだ。

「え？上宮君、もう勧誘されてるの？」

安藤の驚いたような言葉に、首を振る。

「いや。」

「でも、時間の問題だよな。」

漣の言葉に、溜息をついた。

「受ければ良いのにー。強いんだし。」

「ん？上宮、昨日言ったのと矛盾してねえ？」

「ああそう言えば、飯島には「そんなに強くない」って言うっちゃったな。」

「いや…。空手人口って、中学はそこまで多くないんだ。俺が勝ったの、まぐれみたいなもんだし。高校では通用しないと思ってな。」

とりあえず誤魔化すと、横合いから声が割り込んで来た。

「まぐれ？上宮、それ嫌味？」

顔を上げると、どこかで見た顔が私を睨んでいた。どこで会ったんだっけ…。

「準決勝でお前が俺に勝ったのが、まぐれだって？ふざけんなよ、ストレート勝ちしておいて。」

…あー、もしかして。

「仲井、同じクラスだったのか…。」

阪手中出身、仲井淳季。私が出ていた大会で、準決勝敗退した少年だ。阪手中と弥丘中は交流試合をよくしていた為、顔に見覚えがあった。仲井は阪手中の男子空手部部長で、かなり強かった。

そうか、彼と戦った事になっているのか…。

確かに私、準決勝はストレート勝ちだったけど。組み合わせが良くて、優勝候補同士が潰し合っていたため、偶然勝ち残ったような子が相手だったからね。

仲井が戦っていた相手は…

…覚えていない。どうやら、私も多少は記憶をいじられているようだ。もう1つの準決勝で弥丘中の部長だった金手が勝っていたか

ら、どちらが勝つか、試合を見ていたはずなんだけど、何対何で仲井が負けたのかさえ覚えていなかった。

「俺は空手を続けるぜ、上宮。お前、勝ち逃げする気か？案外臆病者なんだな。」

むかつとしたので、なるべく言葉が尖らないようにして言い返した。

「あのなあ。新しい事を始めたいと思う事の、どこが臆病なんだよ。」

「高校では負けるかもしれないから、空手をやめるんだろ。臆病どころか卑怯じゃないか。それとも何か、天才上宮君は、やってみるまでも無く勝てるに決まってるから、そんなつまらないものに興味は無いってか？」

…何こいつ。マジでムカつく。

「誰がそんな事言っただよ。負けるからとか、そういう理由でやめようと思っている訳じゃない。」

こちらの事情も知らないで、好き勝手言わないで欲しい。私だって、空手を続けたいんだ。

「仲井、確かにまぐれとか言ったのは、お前に失礼だった。それは

悪かった、ごめん。だけど、そこまで言われる筋合いは無い。俺は俺なりの理由があつて、空手を続けるか迷っているんだ。臆病者とか卑怯とか、勝手に言っな。」

可能な限り言葉を選んだ私の言葉に、仲井が僅かにひるんだ顔をした。少し語調を緩めて続ける。

「仲井が空手を好きなのは分かつてる。俺だって嫌いな訳でも、軽く見ている訳でもない。ただ、他にもやってみたい事があるだけなんだ。」

「…分かったよ。」

顔を背けて不機嫌な口調でそう言つと、仲井は足早に去つていった。

ずっと黙つて事の成り行きを見ていた4人に向き直り、謝る。
「悪い、折角の食事の時間を台無しにしたな。」

4人は笑顔で許してくれた。

「気にして無いよー。」

「大丈夫だよ、?。」

「うん、気にしないで上宮君。」

「まあ、不可抗力だな、今のは。上宮も、謙遜は程々にした方が良いぜ。」

「…そうだな。」

飯島の言葉に素直に頷いておく。実際は謙遜じゃないんだけどね
...

C r o s s 小さな衝突（後書き）

皆と仲良く…とはいきませんからね。 まあこんな子も必要かと。
あくまで真っ直ぐぶつかる？でした。

Trouble 口論（前書き）

さて、もう1人登場。

Trouble 口論

「ふーん。上宮君って、大人しそうな顔して、言うときは言うのね。ちよつとびっくり。」

やや気取ったような口調の声が降ってきて、内心またかと思いいながら顔を上げた。

目鼻立ちのはっきりした、一目で性格に難ありと分かる女子が、私を品定めするように見下ろしていた。

「でも流石は学年1位ね。理路整然としているっていうか。あれじゃ、感情的になってるだけの仲井君は相手にならないよねえ。」
「相手になるとか、そう言う問題じゃないと思うんだけど…。それより、君は？」

正直私の苦手なタイプだけど、友好的な態度を心がけて、自己紹介を促した。

「ああ、名乗ってなかったね。私の名前は田辺美春。瀬奈中出身よ。上宮君の事は知っているわ。弥丘中出身、上宮？君。中学の模試では負け無し。その上、今の話を聞いた限りでは、文武両道なのね。凄いわ。」

「…ありがとう、田辺さん。」

他にどう答えようも無いので、とりあえず礼を言っておく。プライドの高そうな子なので、勿論さんつき。

「それにしても、仲井君、かつこわるいわね。自分が負けたからって僻んじやってさ。つまらない事で上宮君に絡んだりして、余計みつともないって、気付かないのかしら。」

「…仲井は空手が好きなんだよ。だから、俺が空手を軽く見ているように見えて腹が立ったんだろう。半分は俺の責任だ。」

田辺のあからさまな陰口に、それ以上言つたと釘を刺す。正直、聞きたくもない。今の田辺の方が、余程みつともないと思う。

「でもさあ、それって彼の勝手じゃない？新しい事を始めようとした上宮君に絡む理由にはならないし。馬鹿よねえ。」

明らかに見下した口調に、内心眉をひそめた。

ああ、この態度、この口調。明らかに、学年1位に媚を売ろうとしている。私に喧嘩を売った奴の悪口を言う事で、私の関心を惹こうとしているのは間違いない。

この手のタイプは、始めは媚びている振りをして、自分の思い通りに相手が動かないとなると、途端に敵意を剥き出しにする。相手が女子ならば、いじめの対象にする。自分がリーダーにならなければ満足できない、周りが自分に従わなければ気が済まない性格。

「私」の、一番嫌いなタイプだ。

「あのさー、田辺さん。ごめんけど私達、食事中に、人の悪口とか

聞きたくないんだよねー。？君だって、困ってるよ？」

不意に美樹が口を挟んだ。表面上はにこやかだが、明らかに対戦モードだ。

田辺は一瞬笑みを消したが、直ぐに美樹と同じ笑顔を張り付けた。

「悪口？そんなつもりは無かったのだけど。だって上宮君、勝手な嫉妬であんな風に言われて、可哀想じゃない。」

「可哀想って…。もう解決したんだから良いじゃない。謝っちゃいないけど、多分この先、何か言って来る事もないだろうしねー。」

美樹が直ぐに言い返す。ここからは女子の領域なので、あえて傍観を貫かせてもらった。

「松井さん、上宮君と中学同じなんですってね。名前で呼び合ったりして仲が良いみたいだけれど、腹が立たないの？あんな失礼な事言う奴の事を弁護するなんて、松井さんは友人に冷たいのね。」

やや笑みの薄れた顔で田辺が美樹に冷笑のこもった言葉を浴びせた。

「んー、？君が気にしていないのに、私が勝手に怒るのも、？君に迷惑だから。不満があるなら、陰口なんてみつともない事しないで、直接仲井君に言うしねー。」

美樹の言葉にひやりとした。ほぼあからさまに、美樹は田辺を批判した。

美樹、2日目ではそれは不味いんじゃない…

案の定、田辺の顔から笑みが消えた。

「松井さん、何が言いたいの？」

「言つたでしょー、私達、まだお昼中。人の悪口聞きながらご飯食べたら美味しくないからさー、悪口言うのやめて欲しいんだよー。」

美樹の言葉に、飯島、安藤でさえも肝を冷やした顔をした。それはそうだろう、ここまであからさまな挑発、男子だって滅多にしない。

「…松井さん。貴方、私に喧嘩売ってるの？」

「まっさかー。そんな馬鹿な事しないよ。単にお昼を平和に食べたいて言ってるんだよ。」

「…2人とも、もうよせ。」

限界だ。これ以上は、見逃せない。

「田辺さん、さっき言つたように、俺は仲井の事は気にしていない。だから、余り彼を貶すような事を言わないで欲しい。それから美樹も、ちよつと言い過ぎだぞ。田辺さんだって、俺に氣を使つていてくれたんだ。そうだろう？」

本音も事実も大きく異なるけれど、そういう事にしておいて欲しい。私のせいで美樹がクラスで孤立するのは嫌だったし、入学早々クラスの雰囲気ガスガスするのもごめんだつた。

「…そうだね。ごめん、田辺さん、言い過ぎた。」

「いいえ、構わないわ。それから上宮君がそう言うなら、もう言わないわ。」

美樹は私の意図を察して、田辺は私の最後の言葉に氣を良くして、矛を納めてくれた。

「うん、そうしてくれると嬉しい。ちょっとしたすれ違いだからさ。」

そう言つて、軽く笑みを浮かべてみせた。何やら満足げな笑みを浮かべて美樹に視線を遣り、田辺はその場を去っていった。

「…？君、ごめん。ちょっといらつとしちゃつて。」

「いや、気にして無い。俺もああいうの、好きじゃないし。」

美樹は、ああいうのが嫌いでバレーをやめようかと考えているのだ。我慢できるはずもなかった。それを分かっていたから、あえてあそこまで止めなかったのだから。

それに。…ちょっとすかつとしたのも事実だ。

「…上宮、俺は松井の言っていた事が理解できたぞ。怖えな、女つて…」

飯島がこつそりと囁いて来た。その通りだ。女は力がない分、怖い。男の子は、高校生になってようやくそれを知り始めるらしい。

「…さて。そろそろ食べ終わらないと、間に合わないな。」

15分後には、午後の部が始まる。食べる時間は、後5分くらいしかなかった。

「…おい……。俺、食い終わらねえぞ…。」

何だか絶望したような声を上げる飯島。んな大げさな…

「後で食べればいいじゃないか。」

「持たねえだろうが！上宮、お前もだろ！！半分以上残っているくせに！！」

「…いや、とりあえずオリエンテーションが終わる位までは持つよ。」

「…上宮君、燃費良すぎ。羨ましいなあ。」

…安藤、そんなに悲しそうな顔でお弁当を見なくなっちゃっていいでしょう？

「あー、何気に漣が食べ終わっているというっちゃっかりさー」

「私の出る幕無かったんだもん。」

美樹の突っ込み。漣…拗ねたような口調でそんな事を言わないの。

それ以上は何も言わずに、私達は可能な限りご飯を食べて、講堂へと急いだ。

Trouble 口論（後書き）

昼休み終了です。

？は媚びる子が嫌いです。とは言え田辺も、男の子に自分を売り込んでるだけです。相手が悪かったですね…

T e a m 運動部活動紹介（前書き）

2000PV超えました！びつくり…

これからも？達をよろしくお願いします！

さあ、部活動紹介です。

Team 運動部活動紹介

『ただいまより、部活動紹介を行います。先程配ったプリントの順番に従って進みますので、参考にして下さい。』

相沢先輩のアナウンスが終わると同時に、ユニフォームを着た男子が大勢ステージに飛び込んで来た。

「こんにちはー！サッカー部です！俺達サッカー部は、部員20名、マネージャ3名で活動しています。普段はー」

やたらとテンションの高い部長さんが、サッカー部の魅力について語っていく。

「ーでは、ここでちょっとデモンストレーションを。」

そう言って部長さんは、部員さんからサッカーボールを受け取って、その場でボールを操り始めた。凄く上手。

「…あれだけで食っていけそうだなあ。」

「…えーと、サーカスってことか？」

飯島が話しかけて来たので、小声で聞き返す。

「そうそう。曲芸のレベルだろ、あれ。」

「確かに見事だよな。」

さつきから一度も落としていない。どうやっているのか、目も向けずに後ろ足でボールを受け取ったり、それを蹴り上げ一回転して膝で受け止めたり。後2、3個目が付いているんじゃないだろうか
と思ってしまう。

最後に華麗な技を決めてボールを足で抑えた部長さんが、マイク無しで叫んだ。

「是非一度、見学に来てみて下さい！ありがとうございました！」

時計を見る。今の紹介で、3分。清条高校の部活は50個位あったはずだから…3時間？

…ちよつとげんなりしたのはここだけの話だ。

袴を来た男子2人、女子1人がステージに上がった。

「こんにちは、弓道部です。」

「うわ、兄貴だ…」

飯島が呻く。ステージでマイクを握る少年を見て、納得する。
「似てるねー。」

美樹も同じ事を思ったらしい、感心したような口調でそう言った。
飯島が顔を顰める。

「僕たち弓道部は、去年の大会でインターハイに出場しました。」

「弓道は、武道です。礼儀を重んじ、心を磨く場です。」

「毎年興味本位で来る人はいますが、弓道は皆さんが思うような簡単なものではありません。やる気のない者は来ないで下さい。以上。」

飯島のお兄さんに続いてもう1人の男子、女子と言葉を重ねて、3人はステージを出て行った。講堂に沈黙が訪れる。

「…怖いね。」

安藤の呟きに、私、飯島、澪が無言で頷いた。

「えー？楽しそう。何か、ますます入りなくなっちゃった。」

美樹…。いや、いいけどね。

「…まあ頑張れよ、松井。1月持ったら誉めてやる。」
「言っただね。」

飯島の言葉に、美樹が目をキラキラさせてのる。何だか、もう入ると決めたようだ。

「こんにちは、空手部です。」

道着姿の少年のその言葉に思わず反応してしまった自分に気が付いて、思わず苦笑した。やめるって、決めたのに…

「空手部は、初心者、経験者問わず、監督の先生を始めとして、先輩達が一丸となって指導を行っています。去年私達は、県大会で総合2位という成績を収め、今年こそインターハイに出場しようと毎日切磋琢磨し合っています。興味のある人は、是非見学に来て下さい。」

「だってよー、？君。」

「こりゃ、相当熱心なスカウトが来そうだなあ。」

「他人事だと思って…」

愚痴が漏れたが、内心は飯島に同意している。口では何と云っていようと、インハイ目指しているなら、即戦力は欲しいんだろうな…

ステージ上では、空手部部長の男子生徒が型をやっていた。昇段審査の時に行う型だ。動きに無駄が無く、流れもいい。よく練習しているのが一目で分かった。

「…上手いな。あれなら、大会でも好成績を収められる。」

思わず呟くと、安藤が声を掛けて来た。

「なんだかんだ言って、興味はあるんだね。」

「…まあな。」

曖昧に答えて、部長が型を終えるのを見つめていた。

T e a m 運動部活動紹介（後書き）

スランプ突入しちゃいました。

何をいきなりと言われると返す言葉もありませんが…

とりあえずストック分は更新しますが、その後はちよつと…
すみません。

Club 文化部活動紹介

ようやく（と言っても怒られはしないと思う。90分聞きっぱなしって、辛い…）運動部の紹介が終わり、文化部の紹介に移った。

「こんにちは、美術部です。私達は3年生6名、2年生8名で活動しています。普段は―」

部長が部活の紹介を行っている後ろで、部員達が何やら模造紙サイズの紙にスプレーを順に吹き付けている。傍目には、何を描いているのかはさっぱり分らない。

「―絵が好きな人、彫刻が好きな人、得意不得意は問いません。是非一度美術室に顔を出してみてください。」

部長が紹介を終えると同時に、部員達の作業が終わったようだ。絵を反転させる。

誰もが感嘆の声を上げた。そこには、とても綺麗な風景画が描かれていた。

「…モネだ。凄い！」

澪が凄く嬉しそうな声を上げていた。目がキラキラ輝いている。

昔から絵が大好きだったから、この光景はさぞかし感動ものだろう。素晴らしい出来映えだ。

「すごい。よくもあんな短時間で…」

「準備も大変だろうね。」

「時間を予定通りぴったりに終わらせたってのも、すげえよな。」
美樹、安藤、飯島も、感心しきりだ。

「完成度も高いしな。漣、楽しめそうじゃないか。」
そう言っただけを掛けると、漣が輝かんばかりの笑顔を浮かべて頷いた。

『続きまして、弦楽部とコーラス部です。』

「弦楽？さっき、吹奏楽の紹介していたよな。」

「両方あるそうだよ。俺もそれを聞いた時、ここは本当に公立なのかと疑ったぜ。」

私の漏らした呟きに、飯島が答えてくれた。…ホント、部活の種類、多いなあ。

ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。その他数種類の楽器を手に、生徒達が入場して来た。後ろには、何も持たない生徒が並んで立っている。

「こんにちは、弦楽部です。私達は―」

「こんにちは、コーラス部です。私達は―」

それぞれの部長さんが簡潔に自分たちの部活を紹介した。一礼して、自分の配置に戻る。

顧問の先生なのだろう、中年くらいの男の人が指揮台に上った。

指揮の手が拳がり、弦楽部の生徒達が一斉に楽器を構えた。動きに無駄が無く、皆集中しているのが分かる。

演奏が、始まった。

音がずれる事も無く、息の合った弦楽の奏でに、透き通った歌声が重なって、美しい調べが講堂に響き渡る。

講堂の生徒は、その演奏が始まった最初から、誰も言葉を発さない。誰もが呼吸さえも忘れて、演奏に聞き入っていた。

全ての音が1つに鳴って、演奏が終わった。しばしの沈黙。

指揮をしていた先生が振り返り、一礼した。それでようやく、夢から覚めた。

割れるような拍手の中、感動的な演奏を行った生徒達は去っていた。

『これで、部活動紹介を終わります。一年生は、各教室に戻って下さい。』

相沢先輩のアナウンスを聞いて、私達は講堂を後にし、教室へと足を向けた。

「…私、夢でも見てたのかな。」

澪がぼんやりと呟きを漏らした。

「凄かったな。本当に、夢みたいだった。」

相槌を打つ。美樹も安藤も飯島さえも、半ばぼうつとしていた。今の演奏に、魂を奪われていた。

「コーラスは…あのソプラノは部長かな？凄く綺麗だった。」

綺麗という言葉が生易しく聞こえる。もっと、ぞくつとするような、胸が震えるような声だった。

「多分、そうだと思う。…？、耳良いね。」

「そうか？」

あれだけ目立っていたのだ、気付かずにはいられない。

「美術部もコーラス部も…楽しみ。やりがいありそう。」

澪の静かながらもやる気に満ちあふれた言葉に、笑顔を見せた。

「ああ、頑張れよ。」

…さて、私はどうするかな。

P l a n 放課後、部活見学（前書き）

短めです。

Plan 放課後、部活見学

「さて皆さん、明日は身体測定や内科検診等があります。体育着を忘れないようにして下さい。それから、明日クラスの委員を決めますので、興味のある人は考えておいて下さい。…まあ他には連絡する事ありませんし、部活の見学が待っているでしょうから、これで終わります。起立、礼。」

進藤先生の相変わらずの超短ホームルームが終了し、私達は解放された。

「？君、部活見学どうするのー？」

美樹の問い掛けに、肩をすくめて返事の代わりにした。

「じゃあさー、一緒に弓道部見に行かない？」

「…いや、遠慮する。」

入る気がないのに行ったら、たたき出されそうだ。

「けどさー、どうか行かないと空手部がここまで来ると思うよー？」

「…そこまではしないだろう。」

「甘いぞ上宮、兄貴の話では、そこまでするぞ、この学校。」

飯島の言葉に戦慄した。やばい、どうしよう。

「………帰る。」

「あー、逃げたー。」

からかう美樹。どうせ私はへたれですよ！

「無理だよ？。ほら、見て。」

漣の言葉に窓から校庭を見て、絶句した。

「何だ、あれ…」

校舎から校門までに至る道は、テントで埋め尽くされ、ユニフォームを着た男女がうろついていた。

「つまり帰ろうとすれば、絶対どこかに捕まる、てことだね。」

安藤がややびびった声でそう言った。他に考えようはない。

「空手部もいるだろうし、あの道を通るのは自殺行為だぜ？無難な所の見学でお茶を濁すのが正解だろ。第一、見学行かなきゃ空手を続けないにせよ、どこにも入れないぞ。」

飯島が正論を吐いた。良いよね、行く所が決まっている人は！

「どうしろって言うんだよ…」

思わず弱音が漏れる。漣がクスツと笑った。

「？は美術部とかコーラス部って柄じゃないでしょ？野球や陸上に興味がないなら、美樹と一緒に弓道部見学したら？」

「ええっ、上宮、野球部に来いよ！空手の動体視力を活かそうぜ！」

「いや、陸上だって楽しいよ。」

飯島と安藤の現金な勧誘は無視。

「…弓道部に行く。まあ、見学で終わるだろうけど。」

「おーし、行こっか！…っていうかさ、漣も飯島君も安藤君も、行くところ決まってるなら一緒に回らない？ひやかしひやかし。」

美樹の誘いを、飯島が真っ先に断った。

「俺は行かねえぞ。兄貴にや会いたくねえ。」

「普段家で顔位合わせるだろ？」

妙に嫌がる飯島にそう聞くと、顰め面が返って来た。

「…あのな上宮、学校で会いたくねえだろ、兄弟なんて。」

「そういうものか？俺は弟が丁度3つ下だからそういうのはよく分らないけど。」

「そういうものなんだよ。」

複雑らしい。大変だね、男兄弟って…

「えー。いいじゃん別にー。ほら行こーよ。大体、見学の時に部長さんが来るとは思えない。練習あるんだからさー。」

そう言つて美樹が、飯島と安藤の腕を掴んで歩き出した。

「ほらほら、行こーよ。皆で行けば怖くない、ってねー。」

「お前は元々怖がつてねえだろーが！」

「いや、僕は陸上部に…」

飯島と安藤の抗議を無視して、美樹がそのまま廊下へと出て行った。

「何してんのー、？君、漣。行くよー？」

「皆で行く事決まっちゃったね…」

「…まあ、美樹は昔からああやって皆でわいわいやるのが好きだから。」

苦笑気味に言葉を交わして、私達も後を追った。

Plan 放課後、部活見学（後書き）

さて、学業に向き合わねばならない時期がやって参りました。
という訳で、多分更新頻度落ちます。
ストックもほぼ無いですしね…

A t t e n t i o n 人目と叱責（前書き）

結局更新しているのは何故でしょうか…

A t t e n t i o n 人目と叱責

「…なんか私達目立ってない？」

「うん。…視線が集まってるよね。」

「うう、いづらないあ…」

「…おい松井、どうしてくれんだこの状況。兄貴も気付いちまったじゃねえか。」

「もー、飯島君しつこいなあ。いいじゃん別に。麻菜も香奈も安藤君も、気にし過ぎー。堂々としてたって問題ないよー。」

「…お前が全ての元凶だと思うぜ？松井。」

「うわっ、江藤君ひどー。？君、彼ひどいと思わない？」

「俺に振るな……」

弓道場前。美樹が飯島と安藤を引き摺って廊下を歩いていると、弥丘中メンバに出くわした。それぞれ目をつけている部活に行こうとしていたのを、どうせならばと美樹が強引に弓道部への道連れにしたのだ。

あんな部活動紹介をした部活に早々人が集まるはずも無く。これだけの大所帯で見学に来た私達は、思いっきり目立っていた。

更に、メンバも良くない。

澪は男女どちらから見ても可愛いし、麻菜や香奈、美樹は、タイプは違えど魅力的な女の子。

江藤や飯島は典型的なスポーツマン。江藤も中学の頃から一部の女子に熱い視線を送られていたし、飯島がモテるであろう事は雰囲気を見れば分かる。一応私も女だし。

そして安藤は、「カワイイ男の子」である。女子が放っておくはずも無い。

目立つのは不可避。そしてそれを実現をさせたのは、間違いなく美樹だ。正直、江藤に賛成している。

「他人事みてえな顔をしているが上宮、目立ってんの的大部分はお前のせいだぞ？」

「江藤、その主張には全力で抗議するぞ。」

何で私なんだ。さつきから視線の行き先を辿れば、大抵は澁か漫才している美樹と江藤、後は女性陣の品定め視線が安藤、飯島、江藤に各々のタイプに従って集まっている。私はどっちかというと影が薄い方に分類される。

「いやまあ、あえて人目を避けられる位置に立って、可能な限り気配を薄くしているのは認めるけど。だってこの1年のくせに目立っているメンバと一緒にいて平然としていられる程、図々しい性格していないし。」

「いや、上宮…。その位置をさりげなく確保しやがったお前に思う所は多々あるが、そもそもここに来るまでに俺達が目立ちまくったのはお前のせいだぜ？」

「だから、なんで俺なんだよ。全員等しく目立ってたって。大体、本当に俺1人が目立っていたなら、既に俺は捕まってるじゃないか。」

誰に、とはわざわざ言うまい。

「…説得力あるね、上宮君。というかそんなに捕まりたくないんだ…」

安藤がやや呆れたような口ぶりで言う。

「断るのに苦労すると分かっているからな。」

「まあ、そりやそうかも知れねえけどよ…」

「江藤君はラグビー万歳でも、？君はそうじゃないってことだねー。つていうか、江藤君がまだラグビー部に捕まっていなくてことがちよつと意外だったりー」

この漫才コンビは…まだ目立ちたいのだろうか。

「お前がこんな所に引つ張って来るからだろ！俺は速攻で入る気でいたんだぜ！？」

「そりや俺もだな。「何で直ぐ入らなかったんだ」とか、後で絡まれそうだ。」

「今週は見学だけって名目なんだから、問題ないでしょー。」

「てめえ、反省の色無しかよ！」

「そこ、うるさい！」

遂に弓道部が我慢の限界に達したらしい。講堂に来ていた唯一の女子部員―たぶん副部長―が怖い顔でこちらを睨みつけ、歩み寄って来た。

止めるタイミング逃しちゃったな…

ちよつと反省しつつ、更に目立たないように一歩下がる。何となく咎めるような雰囲気を感じたけれど、だって私は悪くない。

「…貴方、上宮君ね？ 新入生総代なんだから、少しは自覚を持って周りの子を注意しなさい。」

…なのにこうやって絡まれやすいんだ、私は。今日だけで何回絡まれた事が…

「…すみません。ご迷惑をおかけしました。」

とはいえ、この威厳という言葉がよく似合う少女には、頭を下げる事しか出来なかった。怖い…

「…それにしても貴方達、随分な大人数だけど、まさか全員入部希望ではないわよね？ 入る気もないのに冷やかしに来て、練習の邪魔をするなんて、何を考えているの？ もう高校生なのだから、自覚を持ちなさい。」

「…すみませんでした」

全員の声が揃った。謝らざるを得ない程の正論と迫力。マジで怖い…

I n t e r e s t 関心（前書き）

お久しぶりです。

ちよっとストック書けたので、更新します。

I n t e r e s t 関心

「…ですが、美樹は入部希望者です。冷やかしではありませんから、邪魔者扱いはいしないで下さい。」

けれど香奈が続いて口にしたこの言葉に、周りの空気が凍り付いた。見学者の何人かが、こっそり帰ろうとしている。

「ふーん、大騒ぎしておいて、冷やかしいじゃない、と。やる気が見られないわね。そんな甘ったれた気持ちで来られたって、迷惑なのよね。」

その言葉に、美樹が俯く。香奈も騒いだ事は悪かったと思っているのか、口を噤む。

…これ以上目立ちたくはない、けど。

「やる気が見られないと判断なさるのは、早計でしょう。」

親友への不当な評価を黙って見過ごせる程、性根が腐ってはいない。

「…あら、そう？集中力が必要な場所で大声でしゃべる子に、やる気が無いと見るのは当然でしょう。」

冷たい目で私を見る少女。周りも戸惑いがちな目で私を見ているし、さつきまで帰ろうとしていた子達の視線も感じる。

ああ、結局私が一番目立つのか…

「確かに大声を出したのは軽率でした。ですが、美樹はここに来てからずっと、先輩方の練習から目を離していません。的の当たり外れは勿論、弓を引く姿そのものを目に焼き付けていました。入部前に、それだけ弓道に関心を持てる生徒がどれだけいるでしょうか？せいぜい、当たり外れに興味を示すだけでしょ。それだけ強い興味を持っている美樹に対し、やる気が無いから来たって迷惑、と言うのは、失礼だと思います。」

美樹が息を呑む気配が伝わって来る。少女も目を見張って私をまじまじと見つめた後、美樹に目を向けた。先程とは目つきが違う。

「…松井さん、でいいのかしら。」

「…はい。」

「弓道部は礼を重んじる部活です。私語は認められません。」

「…すみませんでした。」

「…ですが、それと同時に強い集中力が求められる場所。会話をしながらも、一度も練習から目を離さなかった集中力には感心しました。」

そして、弓を引く際、常に周りが静かな状況とは限りません。大事なのは、どんな時でも平常心、的に真摯に迎える事。

おしゃべりをしていたのは誉められる事ではありませんが、その間も自分の本来の目的を忘れなかったのは良い事です。…弓道部に入るつもり？」

「はい。」

美樹がはつきりと頷くと、少女の表情が和らいだ。

「女子副部長の河井です。あなたを歓迎します。鍛えがいがありそうですね。」

「頑張ります。よろしく願います。」

美樹が頭を下げる。どこことなく嬉しそうだ。

「おい、河井。お前の番だぞ。」

「今行くわ、飯島君。」

弓道部部长、飯島（兄）に呼ばれて、河井副部长は踵を返した。歩き出そうとして、ふと振り返る。

「……そうだ。上宮君、貴方も入らない？ 貴方も鍛えがいがありそう。」

「……遠慮しておきます。」

河井の目を見れば分かる。入ったら碌な目に遭わない。

「あらそう？ 残念。まあ、考えてみて頂戴な。」

そう言って河井は弓道場へと去っていった。

「……？ 君、アリガトね。」

「いや、別に。目立たないようにしていた分、気付いただけだから。」

「現実の中に本音を隠させてもらった。ここに居たから気付いたのは事実。けど、口を出したのは、親友だから。……たとえば、美樹が覚えていなくても。」

「それより、移動しないか？ そろそろ視線が痛い。」
提案すると、全員が苦笑した。

「目立ったのは、？ のせいだよ？」 と漣。

「うん、それは同感。」 頷いて同意を示す麻菜。

「目立たないようにしてたのにね、？ 君。」 残念でした、と言わんばかりの香奈。

「あっちの女子の視線が凄かったぞ？ 罪な奴だな、上宮。」

「江藤、罪って何だよ…」

目立つ事が罪か。だったら、ここにいる全員が犯罪者だ。

「まあ、もう良いんじゃない？松井、付き合わせたんだ、こつちも付き合え。」

飯島の言葉に、美樹がちょっと眉根をよせた。

「えー、野球ー？まあ良いか。…でも、それって陸上とかラグビーも行くってこと？」

「うん、そうしてもらえると助かるな。」

控えめながら頼み込む安藤。目が輝いてる。

「良いじゃねえかよ、付き合ってたんだから。」

「江藤君が偉そー。ま、どうせまだ時間あるし、そうしょつか。」

半眼の江藤に美樹が唇を突き出しながらも、私達は男子組の提案にのって、移動した。

I n t e r e s t 関心（後書き）

最近、いろいろな小説見て勉強してます。皆さん、上手ですよね…
作者も少しでも近づけるよう、頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5273w/>

Secret School Life—とある少年少女の物語—

2011年10月9日21時30分発行